かぴかぴ

條ひろみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かぴかぴ

【Ｎコード】
Ｎ７３９２Ｍ

【作者名】
條ひろみ

【あらすじ】
地球上にいる約六十億の人類の中で、「モテない人間ナンバーワン」という不名誉極まる地位を三年間キープし続けている、どこにでもいるごく平凡な大学生松岡雅史。
その彼の部屋に「自称天使」を名乗るカピバラが突如現れた！　エセ関西弁でマシンガントークをぶちかます、図々しことといことこの上ないカピバラは、果たして彼にとって幸運の天使となるのかそれとも……

天使ってなんだ？

家賃五万五千円の、六畳と四畳半と台所と和式便所と追い炊きの出来る古い風呂の付いた築三十年の四世帯しかない二階建て木造アパート。ここの二階の奥が僕の部屋だ。バイトから帰り、簡単に破られそうな頼りない鍵を開け靴を脱ぎ、電気を点けて僕は息を飲んだ。部屋の奥に巨大な生き物が鎮座していたからだ。目が合った。

「遅いやないかい」

そして喋った。靴を脱ぎかけた脚が四の字になったまま硬直し、瞬きを忘れ呆然とその光景を眺める。そんな僕にお構いなしで、その生き物は喋り続けた。

「どんだけ待たすつもりやねん。もう日付け変わっとるやないかい。腹減ってしゃーないやんけ。何でお前んとこには何もあらへんねん。普通何かしら置いてあるやろ。人参とかキャベツとか。しかも冷蔵庫の中が消費期限の切れた卵とカビの生えたヨーグルトだけってどういうこっちゃ」

目の前の巨大な生き物には見覚えがある。今世間で大注目の癒し系動物、世界最大の鼠、カピバラだ。

「お、お前、どっから入ってきた？」

「話逸らすんやない。とにかく腹減ってるんや。人参食わせろや。キャベツでもええで」

「何で……カピバラが喋るんだ？」

「カピバラやあらへんがな」

焦げ茶色の固そうな毛並み、黒くでかい鼻の鎮座するぬぼーっとした愛嬌のある顔、鼠にしては大きすぎるその図体。最近動物番組でも引っ張りだこのこの姿形。どっからどう見てもカピバラだ。帰ってきたら部屋の中に飼っているわけでもないカピバラがいる。これだけでも驚愕の事実なのに、更にこいつは人間の言葉を喋るのだ。学校とバイトの毎日で疲れて遂に幻覚が見えるようになったか？

「何なんだお前は一体」

「何だやあれへん。昨日メール送ったったやろ」

メール？　そういえば昨日、知らない相手からメールが来ていたっけ。僕は携帯を開いた。件名は「あなたの天使より愛を込めて」。内容は、「明日あなたのお家に遊びに行くから楽しみにしててね」という、文末にハートマークが三つも付いたものだった。どうせ出会い系のいかがわしいメールに決まっていると思い、特に気にすることも無く無視していたのだ。

「写真も送ったはずや」

よく見ると確かに画像が添付されていた。開いてみるとそこにはどアップのカピバラが写っていた。目の前のカピバラと見比べる。同じ顔のようだ。

「どや。キュウトやろ」

カピバラなので表情は変わらないが、声は自信たっぷりだ。とにかくまずは状況を整理しなければならない。

「あの、質問していいかな」

「あかん。それより人参が先や。お前だって腹減って死にそうなの

にゆっくり会話なんかできんやろ」

カピバラにお前呼ばわりされて腹が立ったが、とにかく何か食わせないと話が先に進まないようだ。僕は脱ぎかけたスニーカーを再び履くと、近くの二十四時間営業のスーパーへ向かい、一袋三本入りの人参を三袋購入した。ついでに明日の自分の朝食用にコーンマヨネーズパンと午後の紅茶のミルクティも買っておいた。

「おお、これやこれ。やっぱたまらんわ人参。色といい形といいハリといい硬さといい味といい全てが最高や」

部屋に戻り人参を差し出すと、カピバラは前足で愛でるように人参を撫で回す。人間ならば恍惚の表情を浮かべているといったころだろう。外見に満足すると、よく伸びた前歯を駆使し、威勢よくガシガシと食べ始めた。九本の人参は、瞬く間になくなってしまった。食べ終えるとカピバラは一つ大きくげっぷをして、足を折り曲げて床に寝そべった。

「これでいいか？　まず何でカピバラがここにいる？」

「さっきも言うたやろ。ワイはカピバラやあれへん」

「違う種類の似てる動物って事か？」

確かカピバラとそっくりな姿をしたヌートリアという動物が、農作物を荒らして被害が出ている、というニュースをこの間見た気がする。

「ちゃうちゃう。ワイは天使や。メールにも書いてあるやろ」

天使？　天使ってなんだ？

清水さんから飛び降りる覚悟で

「何を牛がくしゃみしそうな間抜けぇな顔しとんねん」
「どっからどう見てもカピバラにしか見えないが」
「アホ抜かせ。人間の言葉をこんなに澱みなく操るカピバラがどこにおんねん」

言われてみればそうだけど。

「これは言わば世を忍ぶ仮の姿や。天使がそのまんま現れてみいや。警察やらマスコミやらが駆けつけてえらい騒ぎになるやないか。そもそもこんな狭い部屋に入り切らんわ。せやから人間の世界に来る時は、怪しまれん姿に変身するのが決まりなんや。ま、お忍びっちゅーやっちゃな」
「でも、何でカピバラ？」
「最近、人間界でモテモテだからや。何や、縫い包みまでぎょうさん出てえらいフィーバーしとるそうやないか。そのぐらいはリサーチ済みや。だからお前が喜ぶ思てカピバラになったんやが……あかんかったか？」

カピバラ天使は自信なさ気に自分の身体を見回した。これまでのふてぶてしさが鳴りを潜め、弱気になった。

「いや、まあ確かに可愛いけど……ま、まあいいや。じゃあお前が天使だとしてだな」

するとカピバラはチっと舌打ちをした。

「そのお前ゆうのやめーや。こう見えてお前みたいなガキンチョよ

り遥かに目上なんやで。最近の若いモンはホンマ礼儀知らずやで。腹立つわー。ワイにはれっきとした名前があるんやで」
「何でしょう」
「家康や。どや、カッコええやろ」
微妙。
「こないだＤＶＤ見たんや。『鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス』っちゅーてな。えらい感動してもうたんや。せやから清水さんから飛び降りる覚悟で最近改名したんやで」
「じゃ、じゃあその天使家康が一体僕に何の用だ」
「天使ゆうたら目的は一つに決まっとるがな。恋の成就や」
コイノ……ジョウジュ？
「お前にも好きな娘の一人くらいおるやろ。どこの誰や、早よ言うてみ」
「え？え？　ちょっと待ってよ。恋の成就って……要するに僕に彼女ができるように手伝ってくれるってこと」
「せや。他意はないで」
えええ！？　このカピバラが……
「でも一体どうやって？」
「それは追い追い説明したる。それより早よ教えろや。高校の同級生か？　大学の娘か？バイトの同僚か？　はたまた小学校の初恋の娘か？」
「何で僕が大学行ってバイトしてるって知ってるんだ？」
「あんなあ、どこの誰ぞ分からん馬の骨んとこに天使がわざわざ姿変えて来るわけないやろ。こっちだってボランティアやっとんのと

ちゃうねんで。天界にはな、全世界の人間の中で一人もんの名前の載ったリストが毎日送られてくんねんで。ここで言う一人もんちゅーのは結婚してるかどうかではのうて、恋人がいるかどうかって意味やな。ほいでな、そのリストは恋人の出来ない確率の高い順に並んどる訳や」

「僕は……出来ない確率何パーセントなんだ？」

「確率ゆうてもパーセンテージのこっちゃない。相対的なもんや。だから順位は毎日入れ替わる。その日の気分とか、人間関係とか、気温や湿度、花粉の量などなど環境の変化とかでな。まあそれでも上位一万人は強力やからほぼ固定なんやけどな」

「そ、それで僕の順位は……」

「三年間不動のナンバーワンや」

なっ……僕が……世界中で、六十億人いる人間の中で最もモテない男という事なのか……？　僕はその瞬間、意識が遠のいた。

マクドのゼロ円スマイル見ただけで付き合うてると思い込む

「おーい、大丈夫かー。しっかりせえ」

耳元の、のんびりとした声にぼんやりと目を開ける。そこにはさっきのカピバラがいた。前脚で僕の頭をつんつんと小突く。やはり夢ではなかったようだ。

「まあ確かにショックかも知れん。でもな、勘違いしたらあかんで。『恋人の出来ない確率』ゆうのとモテるモテないゆうのは別個や。ごっちゃに考えたらあかん。例えばな、娘にモテモテでも本人に付き合う気ぃが全く無い男がおるとするやろ。したらそういう奴もリストの上位に来るんやで」

「いいよ別に慰めてくれなくても。モテないのは事実だし」

「まあそう落ち込むなや。そのための天使やで。ワイがおったら百人力や。ちゅーわけやからしばらく世話んなるで」

「しばらくって……どれくらい？」

「そんなん知るかいや。お前に恋人が出来るまでや。言っとくけどな、ワイはあくまで『手助け』やで。基本は自分の力で何とかせえよ」

「な、なあ、ということはさ、僕の前にも誰かのところに行ってたってことか？」

「せや。去年まで大阪の女の子のとこにおった。お陰ですっかり関西弁が移ってしもうた。ちゅーても聞きよう聞き真似で特に教わったわけやないから、ブロークンやけどな。せやから使い方間違うてもクレームは受け付けんで。しかしこれが喋りだすと滑らかでなかなか気持ちええねん」

「関西弁の女の子」と聞いて、甘え上手な可愛らしい子をイメージ

した。標準語圏の男は一度くらい関西弁を喋る女の子を彼女に持ち、「アホやなあ」とか「ウチな」とか上目遣い&甘ったるい感じで言われるのが憧れなのだ。

「その子は上手く行ったのか？」

「誰に口利いとんねん。当たり前やないかい。あっちゅーまに恋人が出来て、結婚もして、もう子供までおんねんで」

「へえ、そりゃ凄い。で、その子のとこにはどのくらいいたんだ？」

「まあ二年やな」

全然「あっちゅーま」じゃないじゃないか。

「いくつくらいの女の子なんだ？」

「四十や」

「え？」

「あ、違うか、ワイが行った時が四十やからもう四十二か」

女の子って……

「ちょっと待て。じゃあここに二年もいるかもしれないってことか？」

「だからそれはお前次第や言うてるやろ」

ただでさえ狭い部屋なのに、こんな図体のでかいのと何ヶ月も暮らすのか。

「その、天使ってのは何にでも変身できるのか？」

「当たり前や。天使やで」

「だったらもう少し、サイズの小さい動物で現れて欲しかった」

「油断しててん。まさかこんな狭い部屋とは思わんかったんや。前

の女の子はここの十倍くらい広いマンションに住んどったんやけど、その時のワイの格好がシマリスやったんや」
「何でまた」
「その女の子の更に前のむさい上にクソ生意気な坊主のとこにおったときにな、『ぼのぼの』ゆう漫画があってな、それ見てああ、シマリスゆうのもラブリイでアリやな思たわけや。で、その子んとこにシマリスで行ったんやけど、部屋は広うて移動に疲れるわ飼うてる猫には追い回されるわでどえらい目に遭うたんや。せやから次は猫がおってもちょっかい出されへんように、もうちょっと大きいサイズで行こうと決めたわけや」

それでカピバラか。せめてビーグルくらいに止めておいて貰いたかった。

「僕の部屋こそシマリスで充分だよ。今から変身してくれないか？」
「それは無理や。一端ターゲットの人間のとこに来たら、目的を達成するまでは天界には帰られへんし、別の姿になる事も出来ひん。そんなん出来るんやったら、前の子のとき、さっさとシマリスやめてるわ」
「そりゃそうか。あ、さっきさ、天使のままだったらこんな狭い部屋に入り切らないって言ったよな。実際はどのくらいの大きさなんだ？」
「せやな、分かりやすいとこで言うたら……東京タワーくらいか？」
「東京タワー！？　そんなにでかいのか？」
「当たり前や。天使やで」

何故か大威張り。

「それで、どうすればいいんだ？」
「どうするやあれへんがな。早よ好きな娘の名前教えろや」

「いない」
「……何やて？」
「今僕には好きな人がいない」
「お前なあアホちゃうか」

人には名前で呼べというくせに、自分はお前を連発する。

「人間なんて恋してナンボの生物やろ。地球は人間に乗っ取られて以来、恋する惑星になったんやで。しかもお前今いくつや」
「二十一」
「か～～情けない。二十一ゆうたら道で見知らぬ娘と目が合うただけでも恋する年頃やで。マクドのゼロ円スマイル見ただけで付き合うてると思い込む歳やで。気になる娘が多すぎて目移りして決められへんちゅうならまだ分かるけどな、好きな娘が一人もおらんて天使掴まえてようそんな台詞が言えたな」
「悪かったな。でもしょうがないだろ。いないものはいないんだから。とにかくさ、明日学校だから。今日はもう寝る」

僕はジャージに着替えると部屋の中央に陣取るカピバラ天使家康を跨ぎ、ベッドのある四畳半の部屋へ移り、電気を消して眠りについた。

実はハゲの髭マッチョ

「おのれはアホか」

昨日と同じく大学、バイトとやっつけて部屋に戻ると開口一番家康にそう言われた。疲れているところを罵倒されるのはなかなか不愉快である。しかし。

「食うもんが無い言うてるやないかい。何で昨夜もしくは朝のうちに前もって買うてこんのや。おのれは天使に餓死させる気ぃなんか？　天使殺したら確実に地獄行きやで」

あ、忘れてた。昨日は仕方が無いとして、今日は確かに僕が悪かった。不愉快指数は半減した。

「ごめんごめん。ちょっと買ってくる」

サンダルを突っ掛けて玄関を出る。この先使い走りにされそうな予感を抱きつつ、スーパーに向かい、大量の人参とキャベツを三玉と、あと安かったので玉葱一袋をぶら下げて部屋へ戻った。

「お、キャベツやないか」

家康は嬉しそうな声を上げ、キャベツに齧りついた。黙っていると可愛いが、長い前歯を剥きだして食べている顔はあまり可愛くないんだな。

「玉葱もあるぞ」

「アホか。そんなもん生で食うたら死んでまうがな」

やっぱり玉葱丸齧りはきついか。

「なあ、シマリスの時も人参とキャベツだったのか？」

「食い物の好みは姿を変えた動物で決まるんや。シマリスの時はどんぐりやらヒマワリの種が無性に食いたくて堪らんかった。隙を見て失敬してたキャットフードもなかなかのモンやったで」

芯までぺろりと平らげると、家康は落ち着きを取り戻した。

「で、誰か好きな娘は出来たか？」

「昨日の今日で出来るわけないだろう」

「あのなあ、そんなん言うてたら死ぬまで全世界で不動の一位やで。学校にも仕事場にも女の子はおるんやろ？　適当に見繕って好きになれや」

「無茶苦茶言うなよな。大体何でそんなに急かすんだ？」

すると家康は途端に涙声になった。

「よくぞ聞いてくれた。実はな、最近上司が変わってん」

「え？　上司？　天使に上司がいるのか？」

「当たり前やないか。ワイら天使は一番下っ端やで。ヒラやで。こき使われるんやで。ほいでな、今までは温厚で優しくて天使思いの良い上司やってんけどな、あんまりにも放任主義で成果が上がらんもんだから先月遂に左遷されてん」

「左遷……ってどこに？」

「アラスカ」

「アラスカ～？」

「せや。人間も少ない上に寒い寒い不毛の土地や。ホンマ気の毒やった～。送別会では天使も上司も号泣やった。ワイら天使の上司は

大天使長言うんやけど、大天使長は国に一人なんや。つまり国を統治してるのが大天使長、その部下がワイら天使ちゅうこっちゃ」
「大天使長が国ってことは、地球を統括する大天使長のさらに上の人がいるのか？」

天使に「人」っていうのもね。

「おるで。神サンや」
「かみさん？　ああ神様か。ええ！？　神様！？」
「せや。クピドちゅー神サンや」
「クピド？　変わった名前だな」
「ああ、お前らにはキューピッドゆうた方が通じるか」
「キューピッドって……あの、弓矢持って背中に羽の生えた可愛らしい子供だろ？」

美術の教科書の、西洋絵画によく出てくる姿を思い浮かべる。

「それはお前ら人間の勝手な創作やろ。歪曲もええとこや。実物は筋骨隆々のつるぴか頭の髭坊主やで。めっちゃ強面なんやで。声も低いしな。あ、今のはオフレコで頼むわ。もちろん羽根と弓矢はあるけどな」

愛らしい姿のキューピッドが、実はハゲの髭マッチョだったなんて……ショック。

「んでな、先月新しい大天使長が来てんけどな、こいつがまた腹立つねん。ワイらの顔さえ見ればとにかく頭ごなしに『くっつけろーくっつけろー』しか言わへんねん」
「くっつけろ？」
「男と女や」

「ああ、そういうことか。でもそれが天使の仕事なんだろ？」
「それはそうやけど……なんちゅーかドライフルーツも真っ青なくらいドライなんや。前の上司は人間の気持ちを第一に考えてくれてん。焦ってくっつけても長持ちせんかったら意味無いやろ。せっかく頑張って成就さしたったのに天界に帰ってすぐ別れてもうたらこっちも切ないしな。

だからホンマに好きな相手が現れるまでじっくり待って、その恋が確実に実るように着実に育てていく。そういう方針やったんや。せやから前の女の子は丸々二年かかってしもたんやけど、でもその甲斐はあったと思うで。最初に出会ったときはどんよ～～り暗い顔やったのが、最後はもう別人みたいにイキイキ輝いてたからな。とても四十には見えんくらい若返っとった。嬉しかったでー。ワイもホンマはそういう仕事がしたいねん。

せやけど今度の大天使長は外資系だか海外組だか知らんけど、とにかく効率第一やねん。ノルマまで決めやがってからに。人間なんかもたもたしとったら恋する前に死んでまうから、一人の人間につき一ヶ月以内でケリつけろとか抜かしよんねん。アホちゃうか」

家康は履き捨てるように言った。もちろん表情は変わらないが。

「そうか、色々大変なんだな天使も」
「分かってくれるか。分かってくれたな？　よっしゃほんなら早速アタックする娘決めーや」
「だからーそれとこれとは別だろ？　いきなり好きになるとか有り得ないから。僕にも前の女の子……その二年かかった女性のようにゆっくりじっくり路線で頼みますよ」
「まあなあ、確かに無理矢理くっつけて喧嘩別れされても後味悪いしなあ……それにお前は三年連続一位で誰も手を出されへんかった

天界の鬼門かつ問題児やからな……多少時間かかっても文句は言われへんやろ。よっしゃ！　そうと決まれば五年でも五十年でも付き合うたる！　心行くまで本命の娘探せいや」

五十年て。爺さんじゃないか。いきなりロングスパンだな。

BBQ

朝、携帯の目覚ましで起きる。ベッドの下では家康がまだ寝息を立てていた。目を閉じてすやすやと眠るカピバラはなかなか可愛い。そっと背中を撫でてみる。剛毛だ。これが天使だとは未だに信じられない。僕は起こさないように軽く朝食を取り、人参を袋から出して卓袱台の上に置き学校へ向かった。

家康が来てから大学でもバイト先でも友達の女の子を変に意識するようになってしまい、会話がぎこちなくなった気がする。僕だって彼女は欲しい。デートもしたいしイチャイチャしてみたい。しかし好きにならないのだからしょうがない。

それにしても家康は一体僕に何をしてくれるのだろうか？　毎日耳元で「好きな相手を見付けろ」と囁くだけなのだろうか。それとも好きな相手が出来てから本格的に手を貸すつもりで、それまではどうしようも出来ないのだろうか。

「当たり前やないかい。まずお前が好きにならんでどないすんねん」

本日バイトは休みだ。早めに帰り、朝の疑問をぶつけた答えがこれだった。

「お前なあ、ワイが『彼氏のいない娘リスト』なんちゅー都合のええもんを持ってきて、こっから選べとでも言うと思っとったんか？」

多少はそういうのも期待したけど。

「そんなんまるで無意味や。大切なんはお前の気持ちや。純粋にこの娘と一緒にいたいと思う気持ちや。そういうのは時間をかけて育むもんや。違うか？　お前も外資系の効率第一主義なんか？　そんならそれでワイも考え直さんといかんのやで」

家康の機嫌が一気に悪くなってしまった。

「わ、分かった分かった。悪かった」

「全く。何も分からんクセに天使に意見するんやない。お見合いみたいに写真見て顔が好みのタイプやから会うてみる、確かにそれも出会いの一つとは思うけどな、ワイはそういうやり方は好かんのや。本来やったらな、お前に既に意中の相手がおって、でも気持ちを伝えられずにいる。そこでワイが手助けをして成就させるちゅーのが理想的なんやけどな。ちょっとばかし来る時期が早かったかもしれん。けど乗りかかった船や、きっちり面倒見たるで」

「なあ家康。何で僕は三年も『恋人出来ないランキング一位』なんだろう？」

「そんなん知るかいや。と言いたいところだが、お前に会うて分かったわ。お前は心を閉ざしとる。女に対してだけやない、男にもや。お前、心から何でも話せる相手、おらんやろ」

痛いところを突かれた。確かに僕には深く関わっている人間がほとんどいない。自分を曝け出すのも苦手だし、他人にもあまり興味がない。

「相手の心は自分を映し出す鏡やで。自分が壁を作っとったら相手も当然壁を作る。壁を作ってる相手からはその本当の魅力は壁が邪魔して見えんわな。見えんかったら好きにもなれん」

「じゃあ……まず初めは僕が改めろってこと？」

「そうや。そうやけど、人間そう簡単に変われるもんでも無い。し

かし自分からは無理でも誰かに突いてもろたら案外壁は簡単に崩れる事もある」
「でもどうやって？」
「自分ホンマ、アホやな～。何のためにワイがいると思とんねん」
「え？」
「お前の女の子の知り合い集めてワイをペットとして紹介せえ。したら必ず今まで以上に打ち解けるはずや。そのためにキュウトなカピバラになったんやからな」
「集めるったってどうすればいい？」
「何かあるやろ。その～何だ、サークルとかバイト仲間で飲みに行くとか」
「カピバラなんか居酒屋に連れて行けるわけないだろ」
「じゃあ学校連れてけ。一緒に退屈でクソオモロない講義受けたるわ」
「無茶言うな。そもそも学校にペット連れて行けるわけないじゃないか」
「ああ言えばこう言う……お前ホンマにやる気あるんかい。天使舐めとったら承知せえへんで」

家康がくわっと口を開けて威嚇する。

「そんなこと言ったって……あ、そうだ、明日先生が体調悪くて休講になったからみんなで川にバーベキューに行くとか言ってたっけ」
「それやそれ！　そういう事は早よ言えーや。まさにグッドタイミングやないかい」
「でももう行かないって言っちゃったし」
「アホちゃうか。そんなもん知らん顔して混じっとったらええんや。大学生なんちゅーもんはあらゆる人間の中で最も適当な人種なんやで。ええか、そのＢＢＱにワイも連れてくんや。そしたら娘たちとの距離が一気に縮まることウケアイや」

BBQって……

世の女性たちは二十四時間三百六十五日常に心ときめくサプライズを

そして楽しかったバーベキューから帰宅。

「お前大概にせーよ！　何で男しかおらんねん！　ワイが大人しくしてる思て汚い手ぇで好き放題触りやがって。むっさ苦しいわー。その上川も水辺も無い蚊ぁだらけの山の中ってどーゆーことやねん！　カピバラは中国語で水豚言うんやで！　しかも野菜が一個もないゆうのはどういう了見や！　１００％肉肉肉のＢＢＱなんか前代未聞の空前絶後やで！　マクドの宣伝文句やあるまいし、ホンマ憎たらしいわー」

久し振りに綺麗な空気を吸い、豪快に焼いた美味い肉を食い、自然と戯れて機嫌の良い僕とは対照的に、家康の怒りは頂点に達している。

「そんなに怒るなよ。しょうがないだろ。女の子が朝になって全員ドタキャンしたんだから。川に行く予定だったのに急に山に変更になったから一人が行きたくないって言い出したらみんなそれに賛同しちゃって……」

男五人、女の子六人で行くはずが、結局男だけになってしまったのだ。

「もうええわ。こうなったら最終手段や。携帯出せや」

「どうするんだ？」

「写真撮れ」

「え？」

「ワイの写真撮れ言うてんねん」

「それをどうするんだ？」
「送れ」
「誰に？」
「誰にやあらへん。お前の知り合いの娘全員に送ったらんかい。件名は『同棲してまーす』や。したらほぼ１００％反応があるはずや」
「でもさ、僕普段女友達にメールなんかしないんだけど。いきなりそんなの送って驚かれないかな」
「アホか。世の女性たちは二十四時間三百六十五日常に心ときめくサプライズを待ってんねんで。普段メールせえへんのなら尚更効果覿面や。しかもこんなキュウトな写真送られて嬉しくないわけないやないかい。ええからさっさと撮って送らんかい」

言われるままに僕は携帯で家康を撮り始めた。「角度が悪い」とか「光線の具合があかん」とかやたらクレームをつけられ、結局十回も撮り直しをさせられた家康の写真を、大学とバイトで日頃顔を合わせている十八人の女友達に送った。そして携帯が沈黙したまま一時間が経った。家康の出す険悪な鼻息が僕の方へ流れてきた。

「お前なあ……どんだけ人気ないねん。ワイの写真やで？　飛ぶ鳥落とす勢いのカピバラやで？　一時間も経っとるんや。普通十八人も送ったら全員とは言わんけど、せめて半分くらいは反応があってしかるべきやろが」
「だから言っただろ。普段メールしないって。驚いて何て返信していいのか戸惑ってるんだよ、みんな」
「はあ……何や物凄う心配になってきたわ。恋愛云々の前に自分、人間としてどうなんやろか」

家康がいつになく深刻な声色を出すもんだから、僕は何だか自分がとっても駄目な人間に思えてきた。そのとき。

「お！　来たで！　返信や！　早よ見てみい」

それは小梅里美という、バイト先で一緒の女の子だった。彼女は僕の一つ年下で、違う学校の大学生だ。背が低く、いつもにこにこと愛嬌のある笑顔を振りまいていて、みんなにサチとかサッちゃんと呼ばれて可愛がられている。

「何やて何やて？」

鼻息荒く家康が手元の携帯を覗き込んできた。

「そんなにくっつくなよ。ちくちくするだろ……『えー！？　松岡さんカピバラ飼ってるんですか？　スゴーイ！　今度見に行っていいですか？』だそうだ」

「ほれ見てみい！　これが全うな反応や。本来なら全員からそういうメールが来るはずなんやが……カピバラは失敗やったんかな。まあええ。で、その娘はどんな子や」

「いつも笑顔の太陽みたいに明るい子」

「よっしゃ。これで決まりや。その子に惚れろや」

「惚れろって、そんないきなり」

「顔は？　好みちゃうんかい。もしやお亀ひょっとこにそっくりとか……」

「いや、凄く可愛らしい」

「ほんだら何を迷う事があんねん。可愛くていつもにこにこでカピバラ好きで。どこに文句の付け所があんねん」

「だって、彼氏いるし」

ふがっと鼻を鳴らし、家康の動きが止まる。

「……ホンマか？」

「そりゃそうだろ。あんないい子、男が放っておくはずがない」
「奪え」
「え？」

恋することは一人でできても恋愛は一人では出来ん

「力ずくで奪わんかい。ええか、ワイの使命は訪れた人間の恋を成就させる事や。恋する相手に男がいようが旦那がいようが金持ち絶倫ジジイと愛人契約結んでようが関係あるかい」

「発言が過激だな。前に聞いた穏やか路線の方針とは随分違うようだけど？　末永く幸せになって欲しいんじゃないのか？」

「そうや。ワイが面倒見た人間には必ず幸せになってもらうで」

僕が幸せになれれば他人はどうでもいいという考え方なのだろうか？

「仮に僕がサッちゃんと上手く行ったとしたら、今のサッちゃんの彼氏が傷付くんじゃないのか？　僕は人の幸せを踏み台にしてまで彼女なんか欲しくない」

「あのなあ……自分一体どこまで甘ちゃんやねん。全部が丸く収まる方法なんてないんやで。あっちが立てばこっちが引っ込む。全ての人間が幸せになれるわけ無いやろ。ただな、勘違いしたらあかんで。全員が同時に幸せになることはでけへんけど、生きてる内に何回かはそういう時が来るねん。幸せは天下の回り物なんやで」

「回り物？」

「せや。金と一緒や。今は不幸でも、いつか巡り巡って良い事が必ずやってくる。そういうもんや」

「じゃあ、僕にとってそれが今ってことなのか？」

「ワイが降りてきたっちゅーことはそういうこっちゃな。それにな、何べんも言うてるけどワイはあくまで手助けや。相手の心を操るわけやない。その里美ゆう娘がお前を好きになったとしたら、それはホンマにお前に惚れたっちゅーこっちゃ。本心から今の男よりもお前を選んだっちゅーこっちゃ。だからお前は何も後ろめたく思うことはないんやで」

そうなんだろうか。確かにサッちゃんだって、今の彼氏と一生付き合うとは限らない。別れてまた別の男に恋することもあるだろう。でも、それが僕であっていいものかどうか。誰からも愛されるサッちゃんのような女の子に僕はまるで相応しくない気がする。

「何を辛気臭い顔しとんねん。どーせあれやろ。『僕なんかじゃもったいない』とか思てんのやろ。アホらし。ほんなら聞くけどな、誰やったら分相応やねん。ほいで分相応な娘がおったとして、そいつに心底惚れること出来んのんかいや。己の気持ちに嘘ついてどないすんねん。本当に好きな娘がおるんやったら地の果て海の果て空の果て宇宙の果てまでも追いかけて首根っこ掴まえて振り向かさんかい。そもそも『分相応の相手』とか言う考え自体、相手に対して失礼やろが」

説得力と迫力はある。しかし発言が既に僕がサッちゃんにゾッコン、みたいになっているのが若干気になるところだ。

「ま、とにかくや、里美っちゅー娘とは会うんやろ？　ワイを交えて」

「そうだな。サッちゃんがカピバラ見たいっていってるんだから、断ることはないか」

これが恋に発展しようがしまいが、あの可愛いサッちゃんと今よりも親しくなれる事は僕にとって単純に喜ばしい事なのだ。

「じゃあさっそく予定を聞いてみるか」

「ちょちょちょちょちょい待てーや」

家康が前脚を僕の携帯を持った腕に引っ掛けて、メールを打つ手を

止めにかかる。

「何だ？」

「あんなーそんなすぐメール返したら、待ち構えてたのがバレバレやろ」

「実際待ってたんだからいいじゃないか」

「か～～せやからお前はアカンちゅーねん。ええか、恋心その物は確かに純粋なもんや。純粋やけど、それを成就させるとなると話は別や。自分一人で想っとる分には構へんけどな、恋愛は相手あってのことや。恋することは一人でできても恋愛は一人では出来んのや。せやから行動を起こす前に、それが本当にベストの行動かを常に考えなあかんのやで」

「それはつまり、駆け引きってことか？」

「ま、そういう言い方も出来るけどな、悪く取ったらあかん。良くも悪くも恋愛は心理戦なんやで。何も考えんと猪突猛進で突っ込む。そういう情熱直球勝負に弱い娘もおるにはおるけどな、そんなんは往々にして上手く行かんのが現実や。百一回目のプロポーズ的告白が感動的なんはドラマの中の作り話だからなんやで。実際あんな事されてみい、暑苦しくてかなわんわー」

「でもさ、大抵の女の子は『駆け引きなんかしない、自分だけを見てくれる一途で真っ直ぐな人がいい』とかって言ってるじゃないか」

「は～自分そんなマスメディア向けの建前綺麗事コメント真に受けとるんかい。哀れなやっちゃ。そんなん当たり前やろ。『駆け引きする人としない人、どっちが良いと思う？』て聞いて『駆け引きする人の方が絶対良いよね～』『心理戦って最高！』とか言う娘がどこにおんねん。

純粋な人が好きという発言をすることによって自分もピュアな女だと思われたいだけや。もしその言葉が真実ならストーカーが理想の相手ちゅーことになんねんで。あれほど相手の事を一途に想うて

る人種は他におらんしな」
「それは揚げ足だろ。家康って何か捻くれてないか？　サッちゃんは本当に純粋な子だと思うけど？」
「じゃあ聞くけどな、純粋な娘に対してやったら正直に想いぶつけたら必ず上手く行くんか？」

花見ならぬカピバラ見

「そうじゃないけど……」
「せやろ？　それに今その娘には彼氏がおんのやろ？　本命を差し置いてでもお前に振り向かせなならんのや。何の策も無い真っ向勝負で勝てるわけないやろ。ちっとは頭使えーや」
「そうはいうけど、じゃあどうすればいいんだ？」
「そのためにワイがおるんやないかい。ワイの仕事はお前が間違った行動を起こさんように、常に最良の行動を選ばす事や。ええか、恋愛は迷路や。迷宮や。ちょっと進むとすぐに二股、時には三股の道に出くわす。選択の連続なんや。しかも瞬時に判断せなあかん。そこで右行くか左行くかはたまた真ん中行くかを間違えると、ゴールまで遠回りになるどころか最悪二度と辿り着けんようになってまうんや。

今だってそうやろ。お前一人やったら速攻で『いつ空いてる？僕はいつでもいいよ』とかアホ丸出しのメール返しとったやろ。そんなんばっか繰り返しとったら一面クリアすら儘ならんうちにゲームオーバーやで」

僕は、家康の言った言葉と一字一句違わず打ち込んだ文章を慌てて消す。

「とにかくメールはまだ返したらあかん。ちゅーかどうせバイトで会うんやろ？」
「いつシフトが被ってるかどうかは分からないけど、まあ近いうちには」
「会うても今日の事、お前から話題に出したらあかんで」
「え？　何で？　僕から話を振ったのに？」

「当たり前やないかい。顔合わせてすぐに欲しがり屋さんの目ぇして『いつ来れる？』言うたら相手ドン引き決定やで。愛想笑いの苦笑い返されて玉砕すんのがオチや。それにな、そもそもさっきのメールを１００％額面通りに受け取るのが間違うてるんや」
「何で？　サッちゃんはカピバラを見たいからああいう返事をしたんだろ？」
「お前なあ、社交辞令ゆう言葉を知らんのか。お前と里美がかなり親しい間柄やったら本気でワイに会いに来たいと考えて間違いないけどな、顔見知り程度なんやろ？　したらフィフティフィフティと思っとかな」
「フィフティフィフティって？」
「ワイに会いたい気持ちが半分。『バイトの先輩からメールが来たからとりあえず返さなきゃ』という礼儀としての意味合いが半分」
「なるほど」
「せやから例え本人を目の前にしても、この事はおくびにも出したらあかんで」
「じゃあサッちゃんの方から切り出すのを待ってればいいのか？」
「まあそういうこっちゃ。向こうから言い出してきたらラッキーや。そのまま話を進めたらええ。もし音沙汰なしならなしでまた考えたる」

「ただいま……」

次の日僕は、いつになく重い足取りで部屋に戻った。

「何やえらい辛気臭い顔して。何かあったんかい」
「いや、その逆。何もなかった」
「里美には会えたんか」
「ああ。今日もバイトで一緒だった。でも、何にも言われなかった」

「ほれ見てみい。だから言うたやろ」
「まさかあのサッちゃんが表面上の社交辞令メールを送ってくるだなんて」
「お前なあ、そんなことでいちいち落ち込まんといてくれるか？　せっかく味おうて食うた人参が消化不良起こすわ。そもそも今まで好きでも何でもなかったんやろ？　メールのやり取りがあっただけでも進歩したと思わんかい」

家康に「文面通り受け取るな」と釘を刺されていたにも拘らず、昨日のメールなどまるで最初からなかったかのように僕に接するサッちゃんを目の当たりにすると、僕の、熟れた桃のようにヤワな心は少なからず傷付いた。

「さてどうする？　このまま里美を攻めるかそれとも他の娘にターゲットを変えるか。ワイはどっちでもええで」

僕も別にどっちでもいい……あ。

「そう言えば今日学校で、みんなが家康に会いたいって言い出したんだけど。ほら、バーベキューに行った連中も家康の事を周りの友達に話したりしてるみたいだし、昨日のメールもあって、僕の部屋に本当にカピバラがいるって事が分かったみたいで」
「お、良かったやないかい。ようやくカピバラの面目躍如やな」
「うん。それでカピバラ見学ツアーをやるって」
「何や大袈裟になって来よったな」
「二十人くらいで来るって。明日」
「二十人てお前アホちゃうか！？　こんな狭い部屋にそんなに入るわけないやろ。床抜けるがな」
「部屋に呼ぶわけないだろ。近くに公園があるからそこでみんなで花見ならぬカピバラ見でもやろうってことになったんだ」

「天使を肴に酒飲むなんてええ度胸しとるな。これだから最近の若いモンは……まあええ。お前の恋のためにピエロになったるわ。まさかまた男だけゆうことないやろな」
「大丈夫だって。今度はちゃんと女の子も来るから」

酔っ払いを差し引いても結構エエオンナ

そして楽しい「カピバラ見」が無事終わって。

「お前らな～大概にせえよ。ワイが注目されとったのなんか最初の五分間だけやないかい。初っ端からガンガン飲んで酔っ払いやがって。しかもこいつら何やねん。酒臭うてかなわんわ」

家康は部屋の狭い廊下に寝転がっている二人の男女を鼻先で小突いた。男は杉田徹、女は佐倉遥子で、どちらも学校では毎日のように顔を合わせている友人だ。調子に乗って飲んで潰れてしまったので、外に放って置くわけにもいかず、僕の部屋まで引っ張って来たのだった。二人とも眉間に皺を寄せ、時折うーんと苦しそうに呻く。

「しょうがないだろ。とても帰れる状態じゃないんだから。取り敢えず回復するまでここで休ませる」

「なあなあこいつらアベックか？」

アベックって。

「いや。違うと思うよ」

少なくともそういう情報は僕の耳には届いていない。

「ふーん。じゃあこの娘はどうや」

家康は右前脚で、チビT、ヘソ出し、デニムのかなり短いショートパンツ姿の女の子、即ち佐倉遥子を指して言った。元々色白だが、酔ってほんのり桜色に染まった長い生脚が艶かしい。

「佐倉かあ……佐倉ねえ」
「何や、あかんのんかい。よく見たら酔っ払いを差し引いても結構エエオンナやないか。スタイルもええし」
「まあ見た目はね」
「中身は？　ストロング金剛か？」
「誰だよそれ。性格は悪くはないんだけど、言葉遣いが完全に男だし、行動もだいぶ飛んでるんだよね」
「何やそんなことかいな。ええやないかい。若気の至りや。それもまた楽しい思い出になるんちゃうか。連れて来たゆうことはお前も満更やないんやろ？　ん？ん？」

家康がぐいぐいと額を押し付けてくる。

「いやだから潰れてたから運んだだけで特に深い意味は……」
「まあええわ。じっくり考え。ワイ風呂入ってくるで」

家康はすたすたと風呂場へ向かった。

「あ、まだ沸かしてないけど？」
「構へん構へん。こんぐらいの気候やったら水風呂で充分や」

家康が水浴びする音を聞きながら、僕はベッドで横になった。そしていつの間にか眠ってしまった。

窓の外が明るい。時計を見るとまだ六時。廊下を見たが二人の姿はなかった。玄関に靴もない。目が覚めて勝手に帰ったのだろう。僕は昨日風呂に入らずに寝てしまったので、身体に纏わり付いた汗を流すためシャワーを浴びる事にした。

風呂場に行き、浴槽を見て度肝を抜かれた。毛だらけである。水面には焦げ茶色の毛が一面に浮いていた。僕はゴミ箱を取りに戻り、知らん顔で眠る家康を睨み付ける。手の平で掬えるだけ掬って捨てると、後は栓を抜いて流した。

毎回こんなに抜けるのだろうか。よく考えたら家康がこの家に来てから風呂に入ったのは昨日が初めてだ。これからは夏場だからシャワーだけでもいいけど、寒くなってきたら先に入らせるわけにはいかないな……などと考えつつ頭と身体を洗い流して上がり、バスタオルで頭を拭いていると生き物の気配がした。何だ、家康も起きたのか、と顔を横に向けるとそこには女が立っていた。

「ぎゃあ」

思わず声を上げたのは僕の方だ。だって裸だし。第一人間がいるなんて思わないし。

濡れたショートの黒髪を

「よっ」

女の正体は果たして佐倉遥子であった。佐倉は右手の人差し指と中指を揃えて、額に軽く添え、格好つけるように僕に挨拶した。しかも初夏の風のように爽やかな笑顔で。

しかし完全に裸を見られた僕は挨拶どころではない。洗濯機のある脱衣所に扉やカーテンなど視界を遮る物はない。早くパンツを穿かねば……だが油断していた僕は着替えを持ってきていない。部屋の箪笥の中だ。とりあえず腰にタオルを巻き体勢を整える。

「昨日は悪かったな。ちと飲み過ぎた」

僕の裸を見たことなどまるで気にしてないかのように、佐倉は言った。

「どどどどこに隠れてたんだ？」

「迷惑かけたからよ、お詫びに朝飯でもどうかなと思ってさ、コンビニでパンとコーヒー買ってきたんだ」

「あああありがとありがと。後で食べるから置いといて」

僕は恥ずかしくてまだ彼女の顔を見ることが出来ずにいる。しかし視界の隅で、佐倉は突っ立ったまま動かない。

「二人分あるんだけど？」

あ、一緒にってことか。ようやく頭が回り始める。

「わ、分かった。じゃあ食べようか」
「その前にさ、シャワー貸してくんねえかな。汗掻いて気持ち悪いんだよね」
「いいけど……着替えは？　女物なんてないぞ」
「これこれ」
佐倉はコンビニのビニール袋から得意気に女性物の下着と白いTシャツを取り出した。
「全く便利な世の中だな。ついでに歯ブラシも買ってきたんだ。あ、そだ、バスタオルだけ貸してくれるか？」
「あ、ああ」
僕はタオルを巻き上半身裸のまま部屋に戻り、箪笥の引き出しを開けた。そして持っている中でもなるべく綺麗で厚手のバスタオルを選んで手渡した。佐倉は両手で受け取ると、ばふっ、と折りたたまれたタオルに顔を押し付けた。
「お、これ肌触り良いな。じゃ、ちょっくら借りるぜ」
言うが早いが佐倉は僕がいる目の前で、着ていたチビTを窮屈そうに脱ぎ始めた。僕は、ごゆっくり、と聞こえないくらいの声で口籠りながら慌てて後ろを向いて部屋に戻り、パンツとジーンズに脚を通し、Tシャツを被った。
「何なんだよあいつ……」
と悪態をつきながらも心臓は高鳴っていた。原因は自分の裸を見られたことが六割、佐倉が目の前でいきなり脱ぎだした事が三割、そ

して、自分の部屋で女の子が裸になってシャワーを浴びているという事実が……五割。全然計算が合っていないが、要するに今の心理状態は許容オーバーという事だ。

「サンキュー。あーすっきりした」

濡れたショートの黒髪を、首を傾げて拭きながら歩く姿が妙に色っぽくて、更に脈拍が上がった。何故だ？　何故よりによって佐倉なんだ？　女らしさの欠片もないような奴だと思っていたのに。

でも昨日見た、酔い潰れて投げ出され、時折もぞもぞと動く彼女の桃色の脚には正直くらくらと来てしまった。邪な考えを見透かされたんじゃないかと思わず家康に目をやるが、静かに寝息を立てているだけだった。

「じゃあ行こうぜ」

佐倉は身体を拭いたバスタオルを僕に手渡してそう言った。

「行くって、どこに？」

「決まってんだろ。公園で朝食だ」

僕のアパートの近くには、大きな沼を中心とした緑の豊かな公園がある。鴨とアヒルが賑やかに集う沼を囲むように一周１キロのランニングコースが設けてあり、早朝から夜中まで一日中誰かしら走っている。僕達が公園に足を踏み入れると、目の前をタンクトップに短パンの、白髪の見事なお爺さんが、汗を光らせながら物凄い勢いで駆け抜けて行った。

「朝から元気だな～」

佐倉はコンビニ袋をぶらぶらさせながら、僕の目の前を歩く。女の子にしては背が高い佐倉は、１６７センチの僕と顔の位置が変わらない。しかも今はヒールが高めのサンダルを履いているので、目線は更に少し上だ。

今まで気にもしなかったのだが、昨日見てからというものどうしてもそのすらりと長く形の良い脚に目が行ってしまう。佐倉は沼の見渡せるベンチを見付けるとそこに腰を下ろした。僕もそれに倣い少し間隔を取って隣に座った。

決して混じる事のない一滴の

「良い天気だ」

空に向かって呟く佐倉。六月の中旬で、降ったり止んだりの梅雨だが、今日は朝から太陽が顔を出している。佐倉は上を向いて目を閉じ、その普段でもほとんど化粧をしない素顔に日の光を浴びせている。思っていたよりも白く透き通るような素肌に一瞬ドキッとした。そして僕はアパートを出てから一言も喋っていない事に気付く。

「どっちがいい？」

沈黙を破るように、佐倉はがさがさと袋から二つ、パンを取り出した。

「ジャムマーガリンとあずきホイップ」

両方とも甘いパンか……朝から甘い物は苦手だが、せっかく買ってきてくれたんだ。

「じゃあ、あずきで」

「ブラックとカフェオレは？」

缶コーヒーも好きじゃないんだけどな……

「カフェオレ貰っていい？」

ほい、と佐倉はパンとコーヒーを半分投げるようにして手渡してくれた。食べ始めると僕は再び無言になってしまった。佐倉はどうい

うつもりで僕をこんなところに誘い出したんだろう。相変わらず行動が読めない奴だ。

「松岡ってさ」

佐倉は正面の沼に顔を向け、ジャムマーガリンが口に入ったまま僕を呼んだ。

「彼女いるの？」

予想外の質問に、カフェオレが気管に入り、思い切りむせてしまった。

「おいおい大丈夫か？」

前屈みで咳き込む僕の背中を、佐倉の右手が優しく摩った。

「あ、ありがと。もう大丈夫」

「そんな変な質問だったか？」

「いや……いない」

「ふうん、そっか」

自分から質問した割には関心がなさそうに素っ気無くそれだけ言うと、佐倉は立ち上がりうーんと伸びをした。白い素肌の長い四肢を携えた身体は、羽根を大きく伸ばした白鳥を思わせた。

「じゃ、またな」

食べ終えた僕のパンの袋と空き缶を摘み上げ袋に入れると、佐倉はやはり爽やかに去っていった。

梅雨の隙間を縫って届く陽射しに暑さはなく、風は吹いていないけれど気温がちょうど良い。佐倉のいなくなった公園のベンチでしばらくぼーっと座っていた。猫が寄ってきてベンチに飛び乗り僕の横で丸くなる。彼女は何であんな事を僕に聞いてきたのだろうか。

佐倉遥子は変わっている。もっとも大学という場所は僕が知る限り世界中のどんな場所よりも個性的な人間が集う場所なのだが。というか、個性を何物にも邪魔されずに発揮できる唯一の場所、それが大学なのだ。自己主張と言ってもいいかもしれない。奇抜なファッションを見に纏う者、専攻する分野に没頭する者や、逆に勉強とは全く関係ない分野にのめり込む者などなどなど。

しかし彼女は、そういったいわゆる傍から見ても分かりやすい変人とは違う種類の「変わった女の子」だ。服装はさらりとして特に目立つわけではないが野暮ったいわけでもない。学校の勉強にどっぷり嵌まっている風にも見えないし、かといって講義には出ずに、他に何か執着している事があるようにも見えない。

じゃあいわゆる「女子大生然とした女子大生」なのかと言われれば、それも違う。彼女は自分のことを「オレ」と言い、言葉遣いも完全に男のものだが、それだって「私は人と違うから」みたいに少々痛々しく無理をして使っている風でもない。彼女の男言葉は、その少し硬質な声色と共に違和感なく耳に入ってくる。

変人とも凡人とも違う、特殊な存在。大学という水槽の中にぽとりと落とされた、決して混じる事のない一滴の油のようだ。

それでいて周りから浮いているのかといえばそうでもない。少なくとも僕なんかに比べればずっと仲の良い友達もいるし、みんなで集まる時も大抵顔を出す。その証拠に昨日だって来たわけだし。

そういえば佐倉っていくつなんだろう。ずっと同い年だと思って接してきたけど、あの落ち着き振り、実は年上なのかな。いつの間にか僕の頭は佐倉で埋め尽くされていた。

「おお帰ってきたか。どやった？」

部屋では家康が待ち構えていた。

引っ越した先が巨大キャベツで出来た家

「……知ってたのか？」
「当たり前や。舐めたらあかん。ワイは天使やで」
出た。伝家の宝刀。お決まりの台詞。
「どっから知ってるんだ？」
「お前が風呂に入ったとこからや。したらすぐに玄関が開いてな、ピンと来たわけや。ああこれは娘が戻って来たなと。わざわざ朝飯買うてくるなんて健気やないかい。あの娘名前なんちゅーねん」
「佐倉遥子」
「はーなかなかどうして『和』を感じさせる透き通ったええ名前やな。気に入ったで」
和を感じるのは苗字が「さくら」だからじゃないのか？　という突っ込みはやめておいた。その次の「透き通ったええ名前」という表現が気に入ったからだ。
「で、何してきた？」
「パン食べてコーヒー飲んだだけだよ」
「嘘こけ。何かしら喋ったやろ。ちゅーかお前何か聞かれたやろ」
「えっ！？　何で……」
「だから言うてるやんか。天使舐めるなて」
そんな事まで分かるのか。
「実は……彼女いるのかって」
「ほーれ見てみい。そんなこっちゃないかと思った。あの佐倉ちゅ

ー娘はお前に気があるな」
「まさか」
「いいや間違いない。そうでなかったらあんな面倒な事するか？」
「それは昨日迷惑かけたからって言ってただろ」
「ホンマにそれだけやったら今度学校で昼飯でも奢れば済む話やろ。しかしそうせんかったっちゅーことは、お前と二人切りになりたかったっちゅーこっちゃ」
「でもおかしくないか？」
「何がや」
「だって僕は世界中で恋人の出来ない男ナンバーワンなんだろ？もし佐倉が僕に気があるとしたら、もっと順位は下がっててもおかしくないんじゃないか？」
「そうや。せやから今日の順位では大幅ダウンや。恐らくトップ一万位圏外になっとるやろうな。言うたやろ？　順位は毎日変わるて」
「だって三年間ずっとトップだったんだろ？　いきなり圏外って言われても信じられないな」
「あんなあ、お前ホンマに恋したことあるんかい。ええか、恋は『落ちる』もんやで。フォーリンラブ言うやろ。落ちるんやからそら一瞬の出来事や。瞬きする間に状況はいくらでも変わるんやで。エベレストの頂上から麓まで一気にダイビングや。しかもワイがついてるんやで。急に風向きが変わったって何も不思議な事あるかいや」
そうか……そうだった。確かに今の僕には天使が付いている。やっと幸せが巡ってくるのかもしれないという淡い期待を抱いてもいいのかもしれない。

携帯の鳴る音で目が覚めた。いつになく早起きしてしまったせいで、いつの間にか再び眠ってしまったようだ。午前十一時を回ったところ。ベッドの下ではやはり家康が眠っている。しかし家康は眠って

いるように見えても実は起きていて、今朝のようにこっちの様子を伺っている事もあるから油断できない。僕は台所から人参を掴むと、家康の鼻先にちらつかせた。一瞬鼻の穴がぷくりと開いたが、起きる様子はない。

メールが来ていた。開いてみると。相手はなんとサッちゃんだった。

『松岡さ～ん。カピバラ見たいです～。今日とか時間ありますか？』

僕は鼾を掻き始めた家康を叩き起こした。

「おい！　大変だ！」

「んん～～何やねん、今ええとこやったのに……引っ越した先が巨大キャベツで出来た家でな、家中食い放題やってんねんで……もうちっと寝かせろや、続き見たいねん」

「キャベツなんていつでも買ってやるから、それよりこれ見ろ！」

僕は再び閉じかけた家康の瞼を人差し指と親指で開き、携帯の画面を見せる。

「ええい！　やめんか！　分かった分かった起きるから……ホンマ鬱陶しいわー……お、やったやないか」

「どうすればいい？」

「こないだのは形式的メールと見せかけてワンクッション置くなんて、なかなかのテクニシャンやな、この娘。まあこれやったら間違いあらへん。どうせお前ヒマなんやろ？　早速呼んだらええ」

一言多い家康を睨みつつ、僕は今日の午後二時に、うちからの最寄り駅で待ち合わせる旨の返事を送った。

絹のような柔肌の頬を伝う宝石のような涙

「お邪魔しまーす。わあ可愛い！　ホントに飼ってるんですね！」

僕の部屋に入るなり、サッちゃんはその大きな瞳を更にまん丸く見開いて喜んだ。

「触っても平気ですか？」

「うん、大丈夫だよ。大人しいから」

「結構毛が硬いんですね～」

初めは恐る恐るだったが、家康が無抵抗だと分かると、サッちゃんは次第に大胆に身体中を撫で、終いにはその寸胴の身体に抱きついた。本当に嬉しそうだ。

「この子名前なんて言うんですか？」

そこで少し困った。正直に家康と言っていいものかどうか。どんな種類のペットにせよ、そんな名前を付ける飼い主はいないだろう。変に思われないだろうか？　しかしいきなりカピバラに相応しい名前が思い付くはずもない。

「家康」

「え？　イエヤスですか？　スゴーイ、カッコイイですね」

案ずるより産むが易し。サッちゃんは相変わらず抱き付いたまま耳元で何度もイエヤス～イエヤス～と囁いている。当の家康は可愛い女の子に抱きつかれ名前を褒められ耳元で囁かれて、ただでさえ長すぎる鼻の下がでれでれと伸びまくっている、ように見えた。はっ

きりいって結構羨ましい状況だ。後で説教だな。

「イエヤスは何が好きなんですか？」

「人参とキャベツ。あげてみる？」

僕はキャベツを取ってきてサッちゃんに手渡した。サッちゃんはキャベツを一枚ずつ剥がして家康の顔の前に持っていく。キャベツを齧る音が部屋に響く。

（お前何ぼーっとしとんねん。早よ会話せえよ）

いつもの家康の関西弁が聞こえてきて、びっくりして顔を上げると、家康はさっきと変わらずサッちゃんに顔を向けたまま、むしゃむしゃとキャベツを齧り続けている。

（安心せえ。今のはお前の脳に直接話しかけたんや。せやから他の人間には聞こえん）

凄い。テレパシーが出来るのか。じゃあ僕も……

（あ、先に言うとくけど、お前は受信専門やで。いくらワイに考え送ろうとしたって無駄やからな）

何だ、詰まんない。僕は念じるために皺を寄せた眉間を解いた。まあとにかくこのままじゃ間が持たない。何か話題を見つけないと。

「ねえサッちゃんあのさ……」

そこで僕の言葉は止まった。なぜなら家康を撫でるサッちゃんの頬には一筋の涙が零れ落ちていたから。まさか家康が噛み付いたのか

？　咄嗟に僕はカピバラを睨む。

（ちゃうちゃう！　ワイは何もしてへん！）

「振られちゃったんだ、私……ごめんなさい」

それだけ言うと彼女は家康から手を離し、僕の顔も見ずに横をすり抜けた。

「サッちゃん！」

ようやく声が出たときにはもう、彼女の小さな身体は見えなくなっていた。

「どういうことやろか……」

サッちゃんが泣きながら部屋を去ってから、訳が分からずしばらくぼんやりとしていたら思わず関西弁が出た。

「真似すなや」

「ああごめん。うつるんだよね関西弁て。でもどうしちゃったんだろ、サッちゃん」

「どうしたやあれへんがな。モテない男ナンバーワンの汚名返上やないかい」

「え？」

「な～にが『え？』や。すっとぼけやがってこのこのオタンコナスが」

家康は額をぐいぐいと僕の身体に押し付けてきた。

「佐倉遥子に小梅里美。タイプは違うがどっちもエエ女やないかい。遂に来たの～お前の黄金時代が。ま、完全にワイの実力やけどな」

得意気な家康は鼻息荒く言ってのけた。二人とも僕の事を気にし始めているのだとしたら確かに家康のお陰ではあるのだが。

「ちょっと待ってよ。佐倉はまあ、その、何というか可能性がなくもないのかもしれないけど、サッちゃんには彼氏が……」

「この期に及んで何を抜かしとんねん。見たやろ、あの絹のような柔肌の頬を伝う宝石のような涙を。聞いたやろ、その後の決定的な一言を。あんな姿、無関心無味乾燥な男に見せるかいや。お前に今の状況を知って欲しい、そして出来る事なら慰めて欲しい……あれだけお膳立てされて女心が分からんかったらお前ホンマにホンマの大アホやで」

「つまりサッちゃんは、最近彼氏と上手く行っていなくて、とうとう振られてしまった。そしてそれを誰かに聞いて欲しかった、そういうことか？」

「誰かにやあらへん。お前にや。ま、結局カピバラを見たい言うのは口実やったというわけやけど、結果オーライっちゅーこっちゃな」

家康は得意満面で腹を見せて踏ん反り返っているが、やはり腑に落ちない。家康の出現により恋の運気が上がって、その結果佐倉が近付いてきた。そこまではよしとしよう。少なくとも学校で毎日顔は合わせているわけだし。

しかしサッちゃんはどうだ。多くても週に二、三回、それもサッちゃんは今の店に入ってまだ三ヶ月だ。バイト中に仕事上の話はするけど、それ以外は本当に挨拶程度の言葉しか交わしていない。そんな男にいきなり本音を、しかも悲しい気持ちを見せるだろうか？

ネガティブは万病のもと

「なあ家康、やっぱりおかしいって」
「しつこいな、おかしないて。疑り深いのも大概にせえ。ネガティブは万病のもとやで。ええか、今お前の遥か頭上には恋の星が燦々と輝いとる。ワイにはお月さんよりもはっきりと見えるで。何やあんまり親しくもないのにいきなり心の内を曝け出されてビビっとるようやけどな、ワイからしたらそんなん不思議でも何でもあらへん。むしろ里美はこのときを待っとったんや」
「このときって？」
「お前に話すきっかけが出来るとき、即ちワイが来るときや。ワイが現れた事によってお前の部屋に遊びに来るええ機会となったわけや。気付いてないのは自分だけで、実は里美は前々からお前の事が気になっとったというわけや。おおかたバイト先で真面目に働いてるとことか見てぐっと来とったんちゃうか。今まで視線とか感じんかったんか？」
「そう言われれば……」

確かに今思えば仕事の事で何か分からない事があると、サッちゃんは必ず僕に聞いてきていたような気がする。例え近くに他のスタッフがいても、敢えて僕に質問していた事があって、何でって思った事も何度かあった。いつも誰に対しても笑顔で接しているが、僕が先に店にいれば、必ず見つけ出して真っ先に挨拶してきたようにも思える。それも飛び切りの笑顔で。ただ確信はない。単なる思い過ごしかもしれない。

「なあ家康、これからどうすればいい？」
「ふふん、これからが本番やな。よっしゃ作戦会議開始や！」

家康は鼻をふんと鳴らし、俄然やる気を出した。

「まずそれぞれとなだらかに距離を縮めていく事が大切やな。どうせお前のこっちゃ、まだどっちが好きか自分でも分からんのやろ？」

「分からんっていうか、別に今の段階じゃ好きも何もない」

「分かった分かった。何度も言うけどな、大事なんはまず自分の気持ちや。せやから今は各々の娘に対する己の心を育てーや」

そこまで家康が言ったとき、玄関の扉の開く音がした。誰だ勝手に人んちに。部屋から匍匐前進で這い出して首だけ出すと、そこには両手を前に組み、伏し目がちにちょこんと立ち尽くす可憐な少女の姿があった。

「サッちゃん！？　どうしたの？」

「さっきはごめんなさい、突然飛び出したりして……あの、またお邪魔してもいいですか？」

サッちゃんはバツが悪そうにもじもじとはにかんでいる。

「もちろん。どうぞ」

僕の言葉に、ぱあっと笑顔が広がった。

「何か飲む？　って言ってもコーヒーしかないんだけど」

「はい！　頂きます！　私、コーヒー大好きなんです」

やっといつもの明るく元気な彼女が戻ってきた。僕は台所に立ち、この家で唯一切らさないであろう食料のコーヒー豆をミルに入れて挽いた。いきなり立てた大きな音に、サッちゃんが近寄って来た。

「松岡さん、本格的ですね。凄い」
「毎日飲む訳じゃないけどコーヒーは好きだからね、飲むときに挽くようにしてるんだ。インスタントは不味いし」
未開封のペットボトルのミネラルウォーターの蓋を捻り、豆と共にメーカーにセットする。間もなくこぽこぽとと音を立て、香ばしい香りが部屋中に広がった。

「どうぞ。砂糖いる？」
「大丈夫です！　ブラックが好きなので」
美味しい、と聞こえないほどの声で呟いてサッちゃんはゆっくりと飲んでいる。僕はそれを見ながらさっきの話題を出していいものかどうか迷っていた。すると、

（あかんあかん！　お前から振られた話とか絶対すなよ！）
ちゃっかりサッちゃんの横のポジションをキープし、身体をくっつけて寝そべっている家康が、欠伸をしながら僕の顔を見ずに語りかけてきた。やっぱり僕の考えていることが分かるんじゃないのか？
ちょっと悪口でも頭に思い描いて反応を見てみるか……そう考えていた時、
「さっきの事、忘れてください」
サッちゃんはカップを見詰めたまま言った。
「あ、ちょっとお手洗いお借りしてもいいですか？」
「あ、うん、すぐそこだよ」

忘れてくれって言われてもね。涙見ちゃったしね。いつの間にか戻ってきたサッちゃんが、僕の背後に無言で立っていた。

「わ！　どうしたの？」

「松岡さん……彼女さんいるんですね」

「え？え？　何で？　いないよ彼女なんて」

「手を洗ったときに見えちゃったんです。洗面所に歯ブラシが二本と、脱衣籠の中の、女性物の下着」

あ！　佐倉のヤツ……わざとか？　いやでもわざとやる意味も分からないが……

「そ、それはさ、彼女じゃなくて友達のなんだ。今朝シャワー浴びてって……」

「朝、シャワー浴びたって事は泊まったって事ですよね？」

サッちゃんの口調が追及するように厳しくなってきた。何だか雲行きがおかしいな。

「いやだから、昨日みんなで飲んで、酔っ払っちゃって帰れなくなったからそのまま……」

「いいですよ、そんな言い訳しなくても。松岡さんに彼女さんがいたって別におかしくないし。私もう帰りますね。コーヒーご馳走様でした」

僕の目を見ずに頭を下げるとくるりと振り返り玄関から出て行ってしまった。ふわりと翻った白いワンピースの裾がスローモーションの残像として瞼の裏側に残る。サッちゃんらしくない棘のある言い方をされてショックだった。

今天界でいっちゃん熱いんは珍獣大百科

「完全に誤解されたな」
「佐倉ちゅー娘もなかなか強かやな。抜け目なく唾付けて帰りよった」

家康はコップに入った野菜ジュースにストローを挿してちゅうちゅうと吸い込んでいる。ベジタリアンの家康を見ていて僕も野菜を摂った方がいいなあと思い、人参を買うついでに一杯で一日分の野菜が摂れるというジュースを買ってみたのだ。飲もうと思ってコップに注いだら家康も飲ませろと言い出して、仕方なく差し出した。

「でもなあ、あの佐倉が計算でそんなことするかなあ」
「ま、ちゃうやろな。あの性格からして、完全に天然や。素ぅや」
「何だよ、どっちなんだよ」
「そんな事はどっちでもええ。それより今大事なんは、里美に対して黄色信号が灯ったゆうことやな」
「どっちでもよくないよ。もし佐倉がわざと置いていったのであれば、僕はそういう計算高い女を好きにはなれない」
「だからちゃう言うてるやろ。考えてもみい、佐倉が今朝取った行動は、かなり勇気がいったはずや。いっぱいいっぱいちゅーこっちゃ。そんなところまで頭回るかいな」

その割にはかなり大胆だったけどな。僕の裸も見たし、目の前で脱ぎ出すし。

「それよりもワイは里美の方が臭うな」
「え？　どういうことだ？」
「一回目に振られた言うて泣きながら出てったやろ。で、再び戻っ

てきて、さっきのは忘れろと抜かしよった。そんなん言われたら男としたら気になってしゃーないやろ。つまりあれは、自分が男と別れた事をより一層強調したかっただけや」

「つまりサッちゃんは僕の気を引こうとしてきたって事か？」

「せや」

空になったコップの底を、未練たらしくストローで啜る音がうるさい。僕は卓袱台からコップを取り上げ台所の流しに置いた。家康は、あ、という声と共に恨めしそうにコップの行方を見詰める。

「せやけども、まさか歯ブラシやら下着やらが出てくるとは思てへんかったんやろ。最後の詰問は嫉妬心やな。それはそれで正直な娘や。お、どこ行くねん、話終わっとらんで」

「洗濯する」

頭の中を整理するために、僕は家康との会話を一時中断した。

僕の知らないところで二人の女性の心が動いていた事は確かなようだ。ただ、理由が分からないことだけが僕を苛立たせる。こんな事を家康に言うと「人を好きになるのに理由なんかあるかい」と言い返されるだけなのだが。

僕はさほど溜まっていないTシャツやパンツやタオル類を洗濯機に洗剤と共に放り込んだ。佐倉の衣類を僕の物と一緒に洗うのは、何となく失礼な気がして躊躇われたので、自分の分が終わった後にもう一度洗濯機を回すことにした。小さいTシャツと下着の二つだけだけど。

「そういえば凄い不思議なんだけど」

自分の洗濯物を干しながら僕は家康に話しかける。

「何がや」

「カピバラって犬や猫みたいに簡単に飼える動物じゃないんだ。一般家庭にいたらかなり珍しい。それなのに、みんな僕が犬を飼い始めた、くらいにしか捉えないのは何でだ？」

「当たり前やないかい。そんな任務と関係のないとこでいちいち大騒ぎされたら鬱陶しくてかなわんわ。ワイが何の生き物に変身しても、周りの人間には『ごく一般的なペット』として認識されるようになっとんねん」

「それって洗脳ってことか？」

「人聞きの悪いこと言うなや。これは天使の任務がスムーズに行くためのクピドの配慮なんやで。ワイかてカピバラが珍獣やいうことぐらい知っとるわ。街中歩いていちいち注目集めてたら仕事どこやないやろ。それでもまあある程度の『物珍しさ』は残してあるけどな。その辺は全部神さんの匙加減なんや」

「ふうん。そんな面倒なことするなら最初から見慣れた犬か猫か小鳥でいいじゃないか」

「お前なあ、天使の事なんも分かってへんやろ。天界なんか何もなくて退屈なとこやねん。せやから毎回降りるときに何に変身するかで悩む、これが唯一の楽しみなんやで。今天界でいっちゃん熱いんは珍獣大百科なんやで」

女の子がデートに行く時に、あれこれと服を選ぶようなものなのだろうか。話しながら自分の分を干し終えると、佐倉の分の洗濯が終わった。

アイロンかけてきちんと畳んで袋に入れて熨斗付けて

「お、このスケベーが」

佐倉の下着を干そうとすると、家康が茶々を入れてきた。

「何言ってんだ。うちの洗濯籠に入ってたからついでに洗濯しただけだろ」

「な～にがついでや。きっちり自分のと区別しとるがな」

「それはだって、女の子の物だし……一緒に洗った事が分かって嫌がられても困るし」

「自分何か、論点がずれてるで」

「どこが？」

「一緒に洗う洗わんの問題ちゃうで。付き合うてるならともかく、普通恋する乙女やったら自分の着てるもんとか片想いの相手に洗って欲しくはないやろ。しかもよりによってスキャンティやろ」

スキャンティ？

「そうか？　だってあいつが置いてったんだよ？」

「ほんだらそれどうするつもりや。乾いたらアイロンかけてきちんと畳んで袋に入れて熨斗付けて返すんか」

「まあそうだな。熨斗は付けないけど」

「それってどうなんやろ……自分の下着を男の家に脱ぎ散らかして帰る娘とか前代未聞やからな……まあ相手がお前に惚れてるんなら問題ないんかな……」

「だってじゃあどうするんだよ。洗わずにそのまま返すのか？　『これ忘れ物』とか言って」

「いやいやそれはさすがにデリカシーなさ過ぎやがな。張っ倒され

るで。まあこういう場合は知らん振りが無難やと思うねんけど、何せ相手がちょっと特殊やからな……まあええか、好きなようにさらせ」

翌日、講義の後、学校の図書室で一人本を読む佐倉に声をかけた。

「ああ、松岡か。何だ？」

無表情のまま関心なさそうに僕を見上げた。

「これ、忘れてっただろ。洗っといたから」

僕は丁寧に畳んで、何の袋にしようか散々迷った末に選んだ、無印の袋へ入れた洗濯物を差し出した。さすがにアイロンはかけなかったけど。しかし佐倉は無言でそれを見詰めたまま受け取ろうとしない。

「置いといてくれよ」

「え？」

「また松岡んちに泊まったときに使うから」

「またって……」

「オレが遊びに行ったら嫌か？」

「嫌じゃないけどさ……」

「じゃ、決まりな」

相変わらず素っ気無く言うと再び本に目を落としてしまった。僕はどうしていいものか分からず所在無げに紙袋を持って立っていると、

「今日行ってもいいか？」

本から目を逸らさずに、佐倉は言った。

「え？　今日？　今日はバイトだから無理だよ」

「何時に終わる？」

バイトの後で会うつもりなのか？

「営業は十一時までだけど、仕事が終わって上がるのは十一時半過ぎるから……」

「鍵貸せ」

「はあ？」

「部屋でカピバラと遊んで待ってるから」

強引に僕から部屋の鍵を奪うと本を閉じて立ち上がり、颯爽と図書室を去ってしまった。と思ったらすぐに二、三歩引き返し、

「メシは食うなよ」

とだけ言って再び去ってしまった。僕は姿勢の良い、綺麗な歩き方をする後姿を、見えなくなるまでぼんやりと眺めていた。

今日はバイト先にサッちゃんの姿は見当たらなかった。昨日ああいう感じで別れてすぐに顔を合わせるのは気まずいので少しホッとした。しかし昨日今日と急に近付いてきた佐倉が頭から離れず、客が帰った後、さげた食器を落とし、グラスとジョッキと刺身の皿を割ってしまった。

いつもは店で賄いを食べて帰るのだが、佐倉が食うなというので空

腹のまま帰ることにした。携帯の時計を見る。もうすぐ今日が終わる。アパートが見えてくると、僕の部屋には明かりが灯っていた。本当にいるようだ。とういか鍵を渡してしまった手前、いてくれないと入れないんだけど。

部屋の前まで来ると、中からハンバーグのような洋食系の美味しそうな匂いがした。反応した胃袋が鳴る。

一人暮らしの二十代男性が思わずぐっと来る女の行動ランキング

「よ、お疲れ」

玄関を開けると、タンクトップに短パンというラフな格好の佐倉が、海老にパン粉をまぶしていた。裸足の長い脚にやはり目がいってしまう。

「先に風呂に入るか？」

勢いに押され、言葉が出ずに首だけ縦に振った。

「じゃあメシの用意しとくから」

僕は部屋にバッグを置き、着替えを持って風呂へ向かった。丸見えの脱衣所で脱いでいると、台所をてきぱきと動く佐倉の背中が見え隠れしている。風呂場に入ると湯船にはお湯が張ってあった。最近は沸かすのが面倒でシャワーばかりなので、久しぶりに浸かる温かい風呂はとても気持ちが良かった。

上がって部屋へ戻ると、卓袱台にはエビフライとオムライス、そして味噌汁とサラダが所狭しと並んでいた。

「凄い。佐倉って料理上手なんだな」

「上手ってほどでもないけどな。一人暮らしだから基本自炊」

一人暮らしだけど基本外食の僕は感心しきりだ。

「松岡んちって冷蔵庫の中に何にもないのな。びっくりした」

「ああ、電気代かかるだけで無駄かもって時々思うよ。でもアイスは好きだから冷凍庫は無いと困るかな」
「ま、いいや。食おうぜ。いただきまーす」
一人でそう言うと、佐倉は元気よく食べ始めた。圧倒されつつも頂きますと言って僕も手を付ける。
「あ、美味い」
トロトロの卵の乗ったオムライスは、中のチキンライスがケチャップではなく醤油ベースの和風な感じで、きりっとした印象。エビフライのタルタルソースも刻んだ胡瓜と玉葱がいいアクセントとなっている。若布と豆腐の味噌汁は、母親の作る物とは違う味で、新鮮だった。
「うん、美味いな」
佐倉は自画自賛し、頷きながら手を休める事無くそれぞれを順番に口に入れている。早くしないと全部食べてしまいそうな勢いなので、僕のペースも自然と上がる。
「ご馳走様。美味しかった」
あっという間に完食してしまった
「どういたしまして」
佐倉は立ち上がり、食器を台所へ運び始めた。
「あ、いいって、僕がやるから」

一緒になって運んでいると、佐倉はスポンジに洗剤を付け、洗い始めた。

「置いとけばいいから」

という僕の言葉を無視し、結局全部洗ってしまった。

「コーヒー飲む？」

「いいね」

そういえば酒は飲まなかったな、と思いつつ、メーカーに豆と水をセットした。さすがに夜中に轟音を立てるミルを回すわけにはいかない。緊急用に、常に二杯分くらいは多めに挽いてあるのだ。

「なあ、どういうつもりなんだ？」

「何が？」

「何がじゃないだろ。いきなり鍵を奪って人の部屋に上がりこんで、ご飯作るなんて」

「だからさっき聞いたじゃねえか。オレが来たら嫌かって。そしたら嫌じゃないって言っただろ？」

「言ったけどさ、何かこう、やることが極端っていうか……」

すると佐倉は四つん這いになり、顔を近付けていきなり僕に口付けた。

「こういうこととかか？」

一瞬軽く触れさせて、佐倉はすぐに顔を離した。頭が真っ白になる。

キスなんて、いつ以来だ……？　急に心臓が激しく収縮を始めた。

「な、何を……」

「オレさ、松岡の事好きなんだけど」

無表情のまま僕をじっと見据える。やはり家康の言う通りだったか。

「昨日と今日で、一応『好きなんですアピール』をしてみたんだが……駄目か？」

駄目かって聞かれても、急過ぎる。

「雑誌に載ってたんだよ」

雑誌？　って何のことだ？　突然の話題転換に頭がついていかず、呆然とする僕に構う事無く佐倉は話を続ける。

「『一人暮らしの二十代男性が思わずぐっと来る女の行動ランキング』ってやつ。したら『手料理作って部屋で帰りを待つ』っていうのが一位だったからさ」

そんなの真に受けるなよ、と思ったが、確かに少々ぐっと来た事は事実である。佐倉は僕を見たまま少し首を傾げてコーヒーを飲む。正面からまじまじと見詰められると、どうしようもなく恥ずかしい。だって佐倉は綺麗だから。

「彼女いないんだろ？　じゃあオレと付き合えよ」

これは……世に言う告白と取っていいのだろうか。随分と男前な告白だな。

「まあ彼女はいないけど」
「けど？　好きな女がいるのか？」
ちらりとサッちゃんが頭をよぎったが、現段階では別に好きというわけでもないし。
「いない」
「じゃ、決まり。今からオレが松岡の彼女な、よろしく」
佐倉は右手を差し出してきた。

コーヒーの代わりにオレに

「ちょ、ちょっと待てよ、落ち着けって」
「落ち着いてるぜ？」
「話の展開が早過ぎて混乱してるんだ。そもそも何で僕なんだ？
これまでそんなに親しくなかっただろ？」
「昨日惚れた」
「はぃぃ？」
「酔い潰れたオレを介抱してくれただろ？　アパートの二階までおぶって運んでくれた」
「そんなの友達なら普通だろ。それに佐倉だけじゃない、杉田の奴だってここに寝かせたし」
「風呂も貸してくれたしな。それで」
「それだけ！？」
「まあ後は……声かな」
「声？」
「ああ。松岡の声はオレのストライクゾーンだ。ずっと聞いていたくなる」
「だったら今までもっといろんな話とかさ、すればよかっただろ。
それに僕は佐倉の事、よく知らないし」
「昨日今日で大体分かっただろ？」
「分かんねーって」
「そうか？　じゃあオレの何が知りたい？」
「いや、そういう事じゃなくてさ、何か調子狂うな……まあいいや。
佐倉っていくつ？」
「二十三」
「え？　そうなんだ。二つも年上なのか」
「次の質問は？」
「いやいや、今のとこでもうちょっと話広げようよ。高校出て何か

やってたの？」
「二浪」
「あ、そうなんだ」
「嘘」
「嘘かよ！　何なんだよ！」
「専門行ってた」
「何の？」
「調律」
「調律って……何だっけ？」
「ピアノの音を合わせる」
「ああ、ピアノの調律ね。そういえば子供の頃実家に来てたかもしれない。へえ、佐倉そんなこと出来るんだ。凄いな」
「半年で辞めたけど」
「辞めたのかよ！　じゃあ後一年半は？」
「一年半じゃない。半年だ。専門行く前に一浪したから。行きたい大学に受からなかったから一浪したんだ。でもやっぱり駄目で、これ以上は親に迷惑かけられないと思って専門に行った。けどピアノとか興味ないし全然面白くないから夏休み明けに辞めて、猛勉強した」
「てことはうちの大学が行きたかったとこなのか？」
「違う。第一志望は結局受からなかった」
「何か複雑だな。しかし興味ないのに何で調律やろうと思ったわけ？」
「浪人して駄目だった後、親と進路について話してたらちょっと熱くなったんだよね。そしたらその時たまたまテレビで調律師の仕事の番組やってて面白そうだったから勢いでつい調律師になってやるって啖呵切った」
「そんなんで決めるなよ……そもそもどこの大学に行きたかったんだ？」
「京大」

「ええっ！？　凄いな、何でまた」
「京都に住んでみたかったから」
「だからーさっきから受験の動機がおかしいだろ」
「コーヒー美味いな。もう一杯くれるか？」

佐倉は会話を中断するように言った。あんまり過去の事を根掘り葉掘り聞かれるのは好きじゃないのかな。僕は台所に行ってコーヒーをセットしようとした。

「あ、ごめん、挽いた豆がもうない」
「じゃあ挽いてくれ」
「そうしてあげたいのは山々なんだけど、ミルってかなりうるさいんだよね。だから夜中は近所迷惑になるから」
「ふーん……じゃあいいや。その代わり」
「お茶でも買ってこようか？」
「キスしてくれ」
「は？」
「コーヒーの代わりにオレにキスしてくれ。嫌か？」

佐倉は「嫌か？」が口癖なのか。僕は少し考えた後覚悟を決めた。脚を投げ出して無防備に座る佐倉の前に座り両肩に手を置いた。そしてゆっくり顔を近付ける。あと数センチ、佐倉の鼻息が僕の唇を掠めたとき、その口が動いた。

「キスしたら、松岡がオレを彼女と認めたという事だから。いいな？」

心臓が痛いほど速くなっている。ここまできて引き返せるわけがない。僕は軽く頷くと、目を閉じてそのまま唇を押し当てた。柔らかく脳が痺れるような感触。このまま溶けてしまいたい。僕達は長い

長いキスをした。

「嫌いじゃない」と「好き」は意味合いが違う

「ほんだらワイ帰るわ」

次の朝、佐倉が「学校に行く前に荷物を取りに一回帰る」と部屋を去った後、起き出した家康が唐突に言った。

「帰るってまさか……」

「あの娘と恋仲になったんや。もうワイの仕事は終いや」

家康は欠伸を噛み殺している。

「ちょっと待ってよ。前の大阪の女性のところには付き合い初めから結婚して更に子供が産まれるまで二年もいたんだろ？」

「そんなんはケースバイケースや。年齢も状況も一人一人違うんやで、個人差あって当たり前やろ。ワイがついてなアカン思たらナンボでもおるけどな、お前はもう大丈夫や」

「そんな……あ、そう、そうだ、昨日大事なのは僕の気持ちって言ったじゃないか。佐倉とサッちゃんに対する心を育てろって。どっちに対してもまだまだ全然大きくなってない。だからもう少しいてもいいじゃないか」

「いや、お前の心はもう決まっとるはずや。確かに短期間ではあったが、お前の心には一人の女しかおらんはずや。種はしっかり根付いとる。佐倉遥子に対する恋の種がな。後はそれを大事に世話して大きくして花咲かせるだけや」

確かに僕は、佐倉を愛しく想い始めている。

「それにしても今回は随分あっさりと任務完了やな。最短記録更新

ちゃうか。ボーナスどんなもん出るんやろ。今度の上司、外資系でスーパードライやけど能力第一主義やから評価するとこはきっちり評価してくれるしな……」

「何だよ、結局自分の事しか考えてないんじゃないか」

「何言うてんねん。ええ仕事したらそれに見合うだけの報酬貰うのんは当たり前やろ。ボランティアちゃうねんで。しかもお前は全世界不動の一位やったからな、今回はかな〜り手古摺る思たんやけど……ま、これもワイの実力っちゅーやつやな」

人参ばっかり要求するうるさいやつだけど、こんなに早く別れが来るとは思っていなかっただけに心の準備が出来ておらず、僕はかなり動揺している。

「本当に行っちゃうのか？」

「なんやお前寂しいんかい」

「べべべ別に寂しくなんか……」

「まあ気持ち分からんでもないけどな。こんなキュウトなカピバラ、そら手放したくないわな。せやけどなワイもこれでなかなか忙しい……」

その時玄関が勢い良く開く音がした。だから人の家の玄関を勝手に開けるなって。僕と家康が揃って部屋から首を出すとそこには朝日を背に受け肩で息をし仁王立ちするサッちゃんの姿があった。

「松岡さん！」

サッちゃんはスニーカーを脱ぎ捨てると駆け寄ってきて僕に抱きついた。

「わわわどうしたの？」

「松岡さん……好きです、ずっと好きだったんです！　だから私と付き合って下さい！」

えええ！？　なんなんだこの展開……

「私の事、嫌いですか？」

何か最近この質問多いな。「嫌いじゃない」と「好き」は意味合いが違うということを是非みなさんに知って頂きたい。

僕より１５センチは背の低いサッちゃんの頭は、ちょうど顎の下にある。ただでさえ可愛い顔なのに上目遣いまでされてかなりドキドキしている。

「サッちゃんの事は嫌いじゃないよ。でも僕には彼女が……」

そこでサッちゃんは一気に涙目になった。睨むような目付き。

「松岡さんの嘘つき！　昨日は彼女いないって言ってたのに！」

「つ、ついさっき出来たんだよ。学校の友達に告白されて」

「そんな……タッチの差で私が彼女になれなかったって事ですか？　先着順なんですか？　じゃあもし昨日の時点で私が告白してたら付き合ってくれたって事ですよね？」

「え？　あ、うん、いや、う～ん？」

それはどうなんだろうか。というより僕がイメージしていたサッちゃんと実像が徐々に掛け離れていっている事にかなり戸惑っている。

「じゃあ前から好きだったって事ですか？　その人の事」

「いや、特に意識はしてなかったんだけど、さっき付き合ってって

言われたから……」
「そんな！　好きでもない人と付き合うんですか？」
「まあ今まで友達だったし、特に嫌いなところもないし」
実際好きになりかけてきているし。
「そんなの不公平です！　私の方が絶対にその人より松岡さんの事を想ってます！　それに、松岡さん自身はどうなんですか？　私とその人、どっちが好きなんですか？」
「いやだから今の段階ではどっちっていう事もないんだけど」
「じゃあ勝負します」
「え？」
「その人と勝負します」
「勝負って何で？」
「簡単です。松岡さんのハートを掴んだ方が勝ち」
するとサッちゃんは背伸びして僕の頭を引き寄せ、口付けてきた。

木ぃが全部巨大な人参

電光石火のキスに僕は目を見開き身体を硬直させたまま突っ立っていることしかできなかった。

「その人とはどこまでしたんですか？　もうエッチしちゃったんですか？」

数秒の後、顔を離したサッちゃんが睨むように僕を見る。昨日の夜はキスした後、疲れていたのか佐倉はすぐに眠ってしまったのだ。だからそれ以上は佐倉に触れていない。

「いやまだそこまでは……」

「キスだけなんですね？　じゃあ私は先手を打ちます」

サッちゃんは小柄な女の子とは思えないほどの力で僕をベッドへ引っ張り、抱き合ったまま横になった。そして僕を下に寝かせると両腕を押さえつけて今まで見たこともないような妖艶な笑顔で僕を見詰めた。僕は金縛りにあったように動けない。

「怖がらなくても大丈夫ですよ」

頬を寄せ耳元で囁くと、サッちゃんは耳朶を軽く噛み、そのまま耳に舌を入れてきた。初めての感覚に鳥肌が立ち思わず声が上がる。そのまま顎、首筋と唇を這わせながら、僕のTシャツを脱がしにかかる。両手は服を脱がせつつ、唇と舌で僕の上半身の色々な場所を責める。無駄のない動きと、初めての刺激になす術がない。

辛うじて首を曲げ家康を見るが、傍観を決め込んでいるのか全く我

関せずで寝た振りをしている。助けて欲しくもあり、このまま流されたくもある。サッちゃんが僕のジーパンに手をかけたとき、机の上の携帯が鳴った。一瞬動きが止まったサッちゃんの隙を突いて僕は上体を起こし電話に出た。佐倉だった。

「学校来ねーのか？　始まってるぞ、講義」

「え、ああ、今から行く」

「分かった。じゃ」

それだけで切れてしまった。講義中に電話って。しかし助かった。確かに告白されたのはタッチの差だし、二人とも可愛いのでどちらと付き合ってもいいとも思う。だが、それでももう佐倉が僕の彼女なのだ。キスをして佐倉を僕の彼女とすることを誓ったのだ。サッちゃんとこれ以上ことを続けたら完全に浮気だ。というか既に浮気と言われても弁解できない事をしてしまったが。

「と、とにかく学校行くから」

「イヤイヤ。その人と別れて私と付き合うって約束してくれるまで離さない」

サッちゃんは上半身裸のままの僕にしがみつく。僕は泣きじゃくる彼女の身体をそっと押し退けた。

「今日学校終わったら連絡するから、ね？　そのとき話しよう？」

「松岡さんの馬鹿！」

僕の身体を突き放すとサッちゃんは出て行ってしまった。

「出たり入ったり忙しい子だな」

家康を見ると半開きの口から涎を垂らしている。本当に寝ているのか？

「家康！　おい、家康ったら！」

「ん……ぬあ？」

「起きろよ、こんな緊急事態になに呑気に鼾なんか掻いてんだよ！」

「森の中を彷徨っててんけどな……木ぃが全部巨大な人参やねん……堪らんかった～ほいでな、途中で小川が流れてんけどな、それが野菜ジュースの川やねん。しかもごっつう冷えてて美味いの美味くないの……」

「起きろって！」

僕はまだ寝惚けている家康の顔を軽く引っ叩いた。

「は。お、どうした？　怖い顔して」

「どうしたじゃないだろ。今、サッちゃんに襲われかけたんだぞ！」

「女に襲われたんか？　そんなんでいちいち情けない声出すなや。それにあんな可愛い娘やったらナンボでもウェルカムちゃうんか。しかもお前男やろ。ホンマに嫌やったらきっぱり断らんかい」

「そうなんだけどさ、それがさ、抵抗しようとしたんだけど身体に力が入らなかったんだよな」

「それは里美がテクニシャンやからやろ」

「とにかく！　僕の彼女は佐倉に決まったんだから、サッちゃんが割り込んで来て佐倉との関係がこじれたら家康のせいだからな」

「えらい言い掛かり付けられたもんや。お前がシャキッとせんのが悪いんやないかい。人のせいにすなや。しかしあの里美ちゅー娘、何かおかしいで」

「だから変だって言ってるじゃないか。いきなりあんなことするなんて」

「いやいやそういうこっちゃない。さっき現れた瞬間な、ワイあの

娘にじいっと見られてん。したら急に睡魔が襲ってきよったんや。何も出来んかったのはそのせいや。起きとったらお前らのラブシーン、黙って見過ごすはずないやろ」
「何だよ、さっきはウェルカムとかテクニシャンとか言ったくせに」
「あれはワイ流の軽いジャブに決まっとるがな。せっかく早よ帰ってボーナスぎょうさんゲットしてロングバケーションや思てたとこやのに邪魔されて堪るかいや。お前気ぃ付けた方がええで。里美は何や普通じゃない。それによく考えたら、タイミングが良すぎるやろ。佐倉の登場とほぼ同時やし、さっきだって付き合うことが決まったすぐ後やし」
「まさか僕のこと、見張ってる？」
「かもしれん」
「と、とりあえず学校行かなくちゃ。あ、家康！」
靴を履きながら僕は叫んだ。
「なんや？」
「まだいるよな？」
「安心せい。里美の事が片付くまでおらなしゃーないやろ」
それを聞いて安心した僕は、学校まで走った。

今だって胸がはち切れそうなんだぜ

「遅かったな」

結局一限は間に合わず、二限の英語から出ることにした。休憩時間、講義室に入り、二十列程ある座席の、最後列の佐倉を見つけると僕は隣に座った。

「汗掻いてるな、何かやってたのか？」

さっきまでのサッちゃんとの行為を見破られたのかと思い、心臓が跳ね上がった。

「い、いや、ちょっと寝過ごしたから走って来ただけ」

その時先生が前から入ってきた。佐倉は首を少し傾けたまま僕をじっと見詰める。表情の読めない顔で見られると、全てを見透かされているようで少し怖かった。まさか疑われてる？

「そっか」

佐倉の口角が少し上がり、優しい顔になった。良かった、バレてない。僕はホッとしたと同時に、二度とあんな事はやめよう、サッちゃんがまた迫ってきても、断固拒否しようと固く心に決めた。

すると佐倉は前を向いて澄ましたまま四人用の長い机の下で、こっそり僕の左手を、右手の指を絡めて握ってきた。いつも僕の予想外の行動で驚かされてばかりだ。ドキドキが止まらない。僕は、この佐倉遥子という人をもっと知りたい、もっともっと好きになりたい

と思った。

昼休み、二人で学食に向かった。思えばこの学校に来て以来、女の子と二人で昼ご飯を食べるのは初めてだ。

「何食べる？」
「松岡は？」
「うーん、そうだな、カツカレーかな」
「じゃオレも」

僕達はトレーに四百円のカツカレーとコップに注いだ水を乗せ、自由に取っていい福神漬けを山盛りにして、奥の空いている席へ向かった。天井の高いガラス張りの食堂からは芝生の裏庭が見える。その一角に白い紫陽花が咲き誇っている。

「毎日食ってるよな？」

カツを一切れ口に入れようと大口を開けた瞬間、佐倉が聞いてきた。スプーンからカレーが滴る。確かに僕は週に三日以上はカツカレーだ。ここの学食はメニューが乏しいので値段と量と味を総合的に比較すると結局カツカレーを選ばざるを得なくなってしまうのだった。

「ちょっと待て、何で知ってるんだ？」
「有名だぜ、松岡のカツカレー好き」
「そうなのか？」
「ああ、オレの中では」
「それって有名って言わないだろ。え？　じゃあ毎日食べてる物チェックされてたってこと？」

佐倉は淡々と一定のリズムでカツカレーを口に運ぶ。

「仕方ないだろ」

「何で」

「好きな男の行動は気になる」

「だって佐倉、昨日好きになったって……」

「あれは決定打だ。前から気になってた」

「だからそれなら、もっと話しかけるとかさ、毎日のように会ってるんだし」

「無理だ」

「どうして」

「緊張する」

「いつも変わらないように見えるんですけど」

スプーンを持ったまま佐倉の動きが止まった。白いプラスチックの皿には、あと三分の一ほどカレーが残っている。

「仕方がない、君にだけ打ち明けよう」

ふう、と一息ついた佐倉は、食べるのを中断して僕の目をじっと見る。

「何を？」

「酔って泊まった次の日、朝飯買って戻ってきただろ？」

「うん」

「松岡の裸を見ただろ？」

「うん」

「シャワー借りただろ？」

「うん」

「一緒に公園でパン齧っただろ？」

「うん」
「彼女いるかって聞いただろ？」
「うん」
「次の日また部屋に行っていいかって聞いただろ？」
「うん」
「いきなり鍵借りただろ？」
「うん」
「飯作って待ってただろ？」
「うん」
「オレがキスしただろ？」
「うん」
「告白しただろ？」
「うん」
「コーヒーの変わりにキスしろって言っただろ」
「うん」
「あれ全部、平常心でやってたと思うか？」
「少なくとも僕よりは落ち着いてるように見えたけど？」
「松岡がしてくれた長いキスの後すぐ眠ったのは、晴れて恋人同士となり、ようやく緊張から解放されて気が抜けたからだ。あの時は死ぬほど緊張したし、心臓だって破れそうだった。今だって胸がはち切れそうなんだぜ？」

佐倉はスプーンを置き、隣に座る僕の太腿に左腕を裏返して差し出した。そして僕の右手を取ると、指を手首に当て、脈を計らせた。白いく細い手首に薄っすらと浮かぶ佐倉の静脈の中を、とくとくとくとくと、有り得ない速さで血液が流れている。

「な？」
「佐倉……」

いつも表情が変わらないので気付かなかった。あの大胆な行動の数々は、緊張と恥ずかしさを悟られないようにするためだったのか。そんな佐倉がたまらなく愛しくなった。僕は彼女の手を握り締めた。

サッちゃんの誘惑

学校が終わり、本当は佐倉と一緒にいたかったのだが、今朝、サッちゃんにちゃんと話をしようと言ってしまったので、連絡を取ることにした。佐倉にはバイトがあるからと言って別れた。嘘をついたことと、サッちゃんに会うことが後ろめたくて、でも言えなくて、心の中で何度も謝った。

また襲われ兼ねないので部屋で会うのは危険だ。僕はサッちゃんを駅前のドトールに呼び出した。先に入ってコーヒーを飲む。サッちゃん、どうしちゃったんだろう。それとももともとああいう子なのかな。今朝の、身体を使って僕を振り向かせようとした行動は、いわゆる色仕掛けとも取れる。しかもあの様子からしてかなり手馴れていた。そんなことを簡単にするような子にはとても見えなかっただけに、ショックだった。

コーヒーが半分になったところでサッちゃんが店に現れた。見渡す彼女に僕は手を上げた。神妙な面持ちで近付き、二人用の小さなテーブルの、僕の向かいに座った。

「何か飲む？」

俯いて小さく首を振る。正直こんなサッちゃんを見たくない。こんなサッちゃんにしている自分も嫌だ。しかしこればっかりは仕方がない。今はもうはっきり言える。僕は佐倉が好きだ。

「松岡さん」

しばしの沈黙の後サッちゃんはようやく名前を口にした。

「何？」

サッちゃんは僕の目をじっと見る。その吸い込まれるような瞳に、逆らうことが出来ない。何だろう、脈拍が少しずつ早くなってきた。なおもサッちゃんは無言で見詰め続ける。そしてにこっと微笑んだ。やっぱり可愛いなあ、サッちゃんは。

「松岡さん、私、可愛いですか？」

「……うん、可愛いね」

「私のこと、好きですか？」

「……うん、好きだよ」

違う違う！

「じゃあ私と付き合いたいでしょ？」

「……うん、付き合いたい」

何を言っているんだ、僕には佐倉が……しかしなぜかサッちゃんの誘導尋問に逆らえない。

「じゃあ今の彼女さんとはお別れして私と付き合いましょう」

「……うん、佐倉とは別れて、サッちゃんと付き合う」

ああ、駄目だ、頭が働かない……サッちゃんの誘惑に勝てない……

「じゃあ行きましょっか」

サッちゃんは席を立つと、僕の手を取り店を出た。向かった先は僕

の家だった。

「ただいま……」

「おお、無事帰って来たか、どやった？」

家康が迎えてくれた。

「お邪魔しまーす」

僕に続いてサッちゃんが部屋に上がる。

（な！　お前里美連れて来たんかいな。普通やないんやから気ぃ付けえ言うたやろ！）

「あ、家康、僕やっぱりサッちゃんと付き合うことにしたから」

（お前自分で何言うてるか分かっとんのか？　佐倉どうすんねん？　それより人前でワイに話しかけるなや。正体バレるがな）

助けてくれ家康！　僕は操られているんだ！　自分の意思とは無関係に言葉が出てくるんだ！

「もうバレてるんだからテレパシーなんか使わなくていいぞ？　家康」

サッちゃんの口調がいきなり変わった。遂に本性を現したのか？　しかし僕はもう口を利けなくなっていて、ただへらへらと笑う事しかできない。

「何やて。何でワイの名前知っとんねん！　貴様誰やねん！　人間

ちゃうやろ！」

人間じゃないって事は、サッちゃんも天使なのか？

キューティクルじゃない本物の天使の輪

「くくくブサイクなカバラピとは笑わせてくれるぜ。まだそんな動物ごっこやってんのか？　哀れな天使め」

カバラピじゃない。カピバラカピバラ！

「貴様……」

「随分探したよ、家康。十年間日本中を飛び回った。しかしお前には会えなかった。そこで俺は考えた。闇雲に追い掛け回すより、網を張って一所にじっとしていればいずれ必ずお前が降りてくるとな」

「網？　網てなんや！」

「頭の悪い奴だな。下等なげっ歯類になって知能も下がったか？　そいつだ。そこでアホ面晒してる松岡雅史だ」

くそ、好き放題言いやがって！　しかしアホ面は解除不能。

「雅史のヤツがどうしたいうんや！　ちゅーか雅史に何したんや！」

「本当に馬鹿になったのか？　お前らおかしいと思わなかったのか？　普通に考えて三年間もモテないランキング一位を貫き通す人間なんていないだろう」

「貴様、堕天使……秀吉か！？」

秀吉？　それに堕天使って？

「かかかやっと思い出したか。お前のした仕打ち、決して忘れないぞ。そう、俺が操作していたんだぜ。三年間不動の一位の人間なんて、天使共は普通嫌がって誰も降りてこようとしない。しかし家康、お前はなかなか優秀な天使だ。出世欲もある。他の天使は尻込みし

ても、お前だけは必ず降りてくるという確信が俺にはあった。

三年間じっとこの男の近くにいるのもしんどかったがな、ひたすら待ち続けたよ。里美の姿になる前は女子大生として同じ大学に通ってたんだぜ？　調子に乗ってかなりの美人に変身したもんだから、危うくミスコンなんぞに選ばれるところだった。あんまり目立つと具合が悪いからな、俺たち堕天使は」

大学のミスコン候補……あ！　確か超美人で噂だった星川結衣だ！
頭も良くてミスコン候補でモテモテだったのに去年いきなり退学してちょっとした話題になってたんだ。まさかあの子が堕天使だったなんて……惚れなくてよかった。つーか堕天使って何だ？

「何でワイが現れた事が分かったんや！」
「お前ら鈍臭い天使には逆立ちしても分からんだろうがな、人間に天使が付くとな、ターゲットの頭の上にキューティクルじゃない本物の天使の輪がくっきりと浮かび上がるんだぜ。もちろんこれは人間には見えない。天使にも見えない。なぜか堕天使にしか見えない。最初見たときは俺も驚いたけどな、嬉しい誤算とは正にこの事」
「堕ちたお前が今さらワイに何の用やねん！」
「だから言ってるだろう。恨みは晴らすまで忘れないと」
「まさかお前……まだあの事根に持っとんのか？」
「当然だ。あれ程の屈辱を受けたのだ、俺の気が治まる方法は一つしかない」

この恨まれよう、家康は一体何をしたんだ？

「な、何や」
「お前を堕とす事だ」
「ふん！　出来の悪いお前ら堕天使と一緒にされるなんて御免やで

！　とっとと失せんかい、このスットコドッコイが！」

そうだ！　頑張れ家康！　負けるな！

「ぐわーっはっはっは！　お目出度いヤツめ。いいか、教えてやろう。いかにお前ら天使が無力かをな。お前らはクピドに監視され大天使長に見張られてその力を制限され過ぎている。しかし俺達は違う。自由だ。フリーダムだ。いいぞー堕天使は。その力を好きなように使えるんだぜ」

「何抜かしとんねん！　お前らは能無しでロクに仕事もできんから成績誤魔化すために自ら人間の姿になってターゲットに惚れさせるちゅう暴挙に出たんやないかい。それがバレてみっともなく堕とされた分際で偉そうな口利くな」

「……全く天使なんてのは哀れな存在だな」

「何やて！」

「大天使長にこき使われて、我儘な人間共を宥めすかして何年もかけて苦労して恋を実らせても『箸の持ち方が気に入らない』なんてクソみたいな理由で簡単に別れやがるんだ。勝手気ままな人間なんかに労力注ぎ込んだところで結局は無駄骨だという事になぜ気付かない？　どうせ別れるんだから人間の手助けなんか端から無意味なんだよ」

「無意味なわけないやろ！　ワイらのお陰で幸せになった連中は数え切れんくらいおるやないかい！」

「ま、そんなの所詮偽善に過ぎんがな。それよりこうして可愛い女の姿になって馬鹿な人間の気持ちを弄んでる方が百万倍気分が良い。男を虜にするこの快感といったらないぜ。猫だの犬だの下らん動物に変身して何ヶ月も何年も同じ部屋から出られないなんてまるで囚人だな。ああ、堕とされて本当に良かったぜ。そこだけはクピドに感謝だな。どうだ家康、お前もイケメンになって女をたぶらかしてみたいと思わんか？」

サッちゃん改め堕天使秀吉は、妖しく光る目で見詰めると、指先で僕の顔をなぞり始めた。全身に鳥肌が立つ。

略してFAA

「黙って聞いとれば……はん！　偉そうな事ばっか言うてる割には雅史一人落とせんで佐倉に先越されとるやないかい。秀吉、お前は堕ちても能無しは変わらんちゅーこっちゃな！」

確かに。たとえサッちゃんが先に告白してきたとしても、恐らく僕は佐倉を選んだだろう。

「な、何だと！　ちょっと油断してただけだ！　まさか俺とほぼ同じタイミングでこいつに接近する女がいるなんて予想外だったんだ！」

「他に女がおったからって、振り向かす事出来んようでは能無しに変わらへん。なーにが『振られちゃったんだ、私……ごめんなさい』や。チンケな手ぇ使いよって。この駄目駄目堕天使め！」

「こ、この野郎、好き勝手言いやがって。いいだろう、そこまで言うなら今から完全にこいつを落としてやる。家康、お前はそこで毛だらけの指でも銜えて見てるがいい」

秀吉は僕の手を取り朝よりも更に激しくベッドに寝かせた。そして僕の上に跨る。僕の身体は金縛りにあったように動かない。このままじゃ本当に襲われる……

「やめんかこのオタンコナスが！　あ、ぐあ！　何や身体が痺れて来よった。や、やっぱり昨日ワイを眠らしたんはお前の仕業やってんな！」

「天使の行動を意のままに制限できる。これも俺達の素晴らしい能力だ。俺は今からこいつと交わる。それが終わればこの松岡雅史は完全に俺、即ち里美に落ちる。落ちたら大天使長に密告してやる。

『ターゲットの恋愛成就に手古摺った天使家康が、遂に禁断の技を使った』とな」

交わるって、やっぱアレだよな……ああ佐倉ごめん。僕にはもうどうすることも出来ない。

「や、やめんかい」

「人間に変身してターゲットを自分に惚れさせた事が発覚すれば天界からは即追放。堕とされる事は免れない。これで家康、お前も晴れて俺達『Ｆａｌｌｅｎ　Ａｎｇｅｌ　Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ』つまり堕天使協会、略してＦＡＡの一員だ。嬉しいだろ？」

「ＦＡＡみたいな出来損ないの腐れ溜り場なんぞ誰が行くか」

「はっは、せいぜい強がっておけ。堕ちたら他に行くところはないんだぞ？」

喋りながら秀吉は、僕の服を脱がし始める。やめてくれ。

「大体お前ら堕天使の目的は何やねん」

「人間界に降りて来た天使の仕事の邪魔をする。それがオレ達の仕事だ。何度も邪魔されて人間の手助けが出来なくなった天使はやがて自棄になり禁断の技を使う。そこまで行けば堕ちたも同然、オレ達の仲間に引き入れる。そして今の天界がいかに腐ってるかを延々叩き込むんだ。そうやって仲間を増やし、頭数が揃ったら天界に殴り込んで大天使長もクピドもぶっ潰す。オレ達の新しい世界を作るんだ。」

「そんなこと出来るわけないやろ」

「家康、お前はなかなか優秀だからな、堕ちた際には幹部として迎えてやるぞ、有り難く思え。話は以上だ」

秀吉は朝よりも淫らな口付けをしてきた。その快感に溺れそうにな

る。

「雅史ぃ！　目ぇ覚まさんかい！　佐倉はどうすんねん！」

そんなこと言ったって、身体が……

「ははは無駄無駄。こいつはもう俺の虜だ。ほーれほれ全部脱がすぞ」

今度は完全に裸にされてしまった。これでもう終わりか……とその時、

「待ちやがれ！　オレの松岡に触るんじゃねええ！」

激しく玄関を開ける音と共に、鬼の形相の佐倉が現れた。ああ、佐倉、来てくれたんだね……

「何だ貴様、これからいいところなのに邪魔するんじゃ……ぐはっ！？　な、何だこの乱暴な女は……ぐぶっがへっ、も、もうやめ……ぎゃあああ！」

す、凄い。

佐倉は可憐な少女の姿をした秀吉の顔面を躊躇うことなく二発殴り、お腹に膝蹴りを入れた後、美しすぎる回し蹴りを見事にこめかみの辺りに決めた。その衝撃で折れた歯が秀吉の口の中から飛び出す。白い欠片はスローモーションで放物線を描き家康の額に当たって畳に落ちた。佐倉の電光石火の攻撃をまともに喰らい、崩れ落ちた秀吉はそのまま気絶した。

「松岡！」
「ん……」
ようやく身体が解放されたと思ったら僕の唇には佐倉の暖かく柔らかい唇が触れていた。僕はそっと佐倉の顔を離す。
「佐倉……これには訳が……」
「ああ、分かってる」
佐倉が呟いた時、頬が濡れるのを感じた。
「泣いてるのか……？」
「泣いてない」
そう言いながらも佐倉の目には涙が溜まっていた。胸がきゅんとなった。僕は首に手を回してその頬を引き寄せた。それにしても佐倉はなぜこの状況を分かっているのだろうか？　僕は不思議でならなかった。

オレは天使だ

ベッドの下にサッちゃん、いや、堕天使秀吉がいまだ白目を剥き、開いた口から涎を垂らして伸びていた。ああ、あのたっぷりと太陽を浴びて元気一杯に花を咲かせたヒマワリようなサッちゃんがこんな痛ましい姿になるだなんて……しかしこれはサッちゃんにあらず。現実から目を背けてはいけないのだ。

秀吉の力から解放され、快刀乱麻の活躍を見せた佐倉に興奮した家康は、状況を事細かく、そして多少の脚色ありで身振り手振りを交え先程の戦闘シーンを再現し始めた。とはいってもカピバラなので、そのアクションシーンは、かなり要領を得なかったが。

気が付いてまた悪さをするといけないので、秀吉の両手両足は縛ってある。その可愛らしい口から時々漏れる呻き声を聞くと、これまでの明るくみんなに好かれるサッちゃんが思い出されて縛る事に抵抗があったが仕方がない。いくら可愛い風貌でも堕天使が危険な存在である事に変わりはないのだ。

「なあ、佐倉って格闘技か何かやってたのか？」
「高校の時、少林寺拳法部だった。関東大会で優勝したこともある」
「まじで……」
「でもな、少林寺の大会は空手みたいに実際に戦うわけじゃない。演舞だ」
「エンブ？」
「ああ、要は演技だな。型の正確さと美しさを競うんだ」
「そうなんだ」

演舞というものがどういうものか、想像していると佐倉は、でも、

と続けた。

「部活の練習ではスパーリングもやる」

「スパーリングって、殴り合いか？」

「本気の殴り合いだ」

「佐倉も殴られたのか？」

「ああ」

無理だ。僕にはこの綺麗な佐倉を殴るなんて。当たり前か、自分の彼女だもんな。というかあれ程の実力の持ち主だ、格闘技といえば、高校の体育の授業でやった柔道くらいしか経験のない僕のやわなパンチなど軽くかわされる事だろう。

「女はオレ一人だったからな。いつも先輩に殴られてる弱い奴でもオレには勝てると踏んだんだろう、そいつらのストレス発散のために一年の頃はぼこぼこにされた」

「何だと……許せん！」

「でも半年後にはオレを殴った男子部員全員に十倍にして返したけどな。何人かは鼻の骨も折ってやった。それからというもの、誰もオレとスパーリングしなくなった」

「何だと……じゃあ許してやるか……なあ家康、結局この秀吉って奴は、家康に復讐するために僕に近付いたってことなのか？」

「せや。ねちっこい奴やでーホンマ」

「そうか、僕は利用されてたのか。つーか家康、こいつに一体何をしたんだ？」

「それはやな……そんな事より、佐倉、お前何で雅史が秀吉に襲われてるて分かったんや？」

家康は何故か理由を濁し、佐倉に話を振った。

「知りたいか？」
「そら知りたいわな」
「僕も」

佐倉がここへ来るなり秀吉に殴りかかったという事は、いや、それ以前に、秀吉が僕の家に一緒に来た事を知っているという事は、佐倉は初めからサッちゃんが堕天使秀吉だと見抜いていた事になる。家康でさえその正体が見抜けなかったのだ。堕天使が普通の人間に、そう簡単に見破られるとは思えない。普通の……は！　もしかして佐倉は……

「オレは天使だ」

僕の表情を読み取るように佐倉は頷いた。やっぱりそうなのか……

「な、何やて……ちょい待ちーや、いくら天使でも堕天使の正体までは見破れんはずやで」

とっくに正体がバレた家康は、もはや佐倉に対して普通に話しかけている。

「実はな、オレは人間界にはびこる堕天使を捕まえるために特別に降りて来たんだ。いわゆる特殊任務ってやつだ。確かに天使のオレにこいつら堕天使の正体は分からない。でも怪しい奴は何となく分かる。ある程度の予測は付くという事だ。その予測を基に特定の奴をマークする。里美はその普段の行動から、オレの中ではほぼ堕天使で間違いなかった。そして家康が現れた途端、松岡に近づいた事で予想は確信に変わったんだ」
「そんな、佐倉お前……じゃあ僕の事を好きだって言ったのは嘘なのか？　天使が人間を好きになるなんて有り得ないんだろ？　天使

なのに嘘ついていいのか？」

僕をこんな気持ちにさせておいて、実は天使だったなんてそんな話、認めない。

「嘘じゃない。最初オレは任務のために松岡に急激に近付いた。お前が里美に落とされてしまってからでは手遅れだからな。しかし、松岡と会う内に、オレは次第にお前に惹かれていったのも事実だ」

「そんなんおかしいやないかい。秀吉を阻止するために佐倉が雅史を惚れさせてしもうたら、今度はお前が堕とされてしまうやないかい」

家康が歯を剥きだした。

「そうだよ。天使は人間の姿になって人間に恋をさせたらいけないんだろ？　僕はもう佐倉の事が……」

本気で好きなんだ、そう言おうとした時、部屋の入り口に小さな影が動く気配を感じた。見ると、そこには白と茶色の斑模様の猫が座っていた。

「もう遥子さんたら、いい加減にしなさい」

そして猫が喋った。唖然とする僕と家康をよそに、猫は話を続けた。

「そんな真顔で冗談を言っても冗談に聞こえないって何度言ったら分かるの？　雅史さんが本気にしてるじゃない」

え？　どういう事だ？　佐倉を見ると、あらぬ方向に目をやり、しれっと舌を出している。この猫は誰なんだ？

何だかんだ言っても相手は神様

「ごめんなさいねえ、雅史さん。今遥子さんが言った事は冗談だから。気にしないで」

状況が飲み込めないが、とりあえず佐倉を見ると、

「すまん、本気にすると思わなかったから」

と言って悪びれるでもなく軽く頭を下げた。そして家康の様子がおかしい。身体がぶるぶる震えているし、目には涙が溜まっている。

「ど、どうしたんだ家康」

「ば……」

「ば？」

「婆ちゃん！」

「ばあちゃん！？」

僕と佐倉が同時に叫ぶ。これにはさすがの佐倉も驚いたようだ。家康は猫に駆け寄った。猫より遥かに大きな鼠が、その小さな身体に抱きついて泣いていた。

「これこれ家康、男の子が人様の前で泣くんじゃありませんよ」

「アラスカは寒かったやろ？」

ようやく家康は震える声を出した。

「アラスカ……？　アラスカっていえば家康の前の上司が飛ばされ

たところだよな？」
僕は家康がここへ来てすぐの時、上司に対する不満をぶちまけていた話を思い出した。
「せや。婆ちゃんが前の上司や」
「ええっ！？　じゃあ家康のお婆さんが大天使長ってこと！？」
僕は首を傾げて僕を見詰める愛らしい猫を見た。この猫が元日本代表なのか……
「婆ちゃん風邪引かんかったか？　少し痩せたんやないか、ちゃんと食うてたか？」
「あらあら心配してくれてたのねえ。家康は本当に優しい子」
猫大天使長は、昔からこの子はお婆ちゃん子でねえ、と誰に言うともなく呟きながら、前脚で寝そべる家康の頭を撫でた。何かもう、訳分からん。
「あの、アラスカにはどのくらいいたんですか？」
猫だけど偉い方のようなので思わず敬語になる。
「百年よ」
「百年て……ちょっと待て。家康お前、上司が変わったのって最近の話じゃなかったのか？」
「せやで、たった百年前や。何かおかしいか？」
「おかしいだろ！　百年のどこが最近なんだよ！」
「何を怒っとんねん。確かにお前ら人間にしたら長いかも知らんけどな、ワイらにしたらそない昔でもないんや」

薄々感じてはいたが、天使と人間では時間の感覚がだいぶ違うようだ。僕は前から気になっていたことを聞いてみた。

「家康、お前一体何歳なんだ？」

「千飛んで二十六や」

「一〇二六歳！？　そんなデーモン閣下じゃあるまいし……じゃ、じゃあお婆さんは？」

「あら雅史さん、駄目よ、レディに気安く歳の事を聞いちゃ」

天使なのに教えてくれないのかよ。

「そういえば松岡は真っ先にオレの歳聞いたよな」

ぼそっと呟いた佐倉の視線が刺さる。いいじゃないか、気になってたんだから。

「婆ちゃん、もう日本に戻って来れるんか？　アラスカの任期は終わったんか？」

「ええ、終わったわ」

「ホンマか！？　じゃあまた日本でワイらと仕事してくれんねんな？　ワイらの上司になってくれんねんな？」

「……大天使長はね、とってもハードな仕事なの。家康、私はねえ、もう歳だから引退することにしたわ」

お婆さんは、喜びの声を上げ、興奮する家康を宥めるように言った。

「引退て……！　じゃあもうワイらと一緒に仕事してくれへんのか？」

再び家康の涙声が部屋に響く。よっぽどこのお婆さんの事が好きなんだな。

「家康そんな顔しないの。いつかは誰しもこの時が来るんだから。百年でちょうどきりも良かったし。クピドには『後釜が見付かるまでいてくれ』って泣きつかれたけどね、『あ～ら私より優秀な方はたくさんいらっしゃるでしょう？』ってぶっちぎってきちゃった」

ぶっちぎる……カッコいい。猫のお婆ちゃんは、悪戯っ子のようにぺろっと舌を出した。その仕草が人間臭くあまりにも可愛くて、思わず笑ってしまった。

「じゃあ、お婆さんは、今は普通の天使って事なんですか？」

「そうねえ、引退した身だから厳密には家康のような現役とは違うけれど、まあ人間からしたら天使と同じようなものね」

「ということは、隠居って事ですよね？　それなのに仕事をするために佐倉のところに降りてきたんですか？」

佐倉を「遥子さん」と呼んで知っているということは、このお婆ちゃんは佐倉についている天使ということだ。

「確かにね、本来なら現役の天使に任せておけばいいんだけど、引退する時にクピドに交換条件を出されちゃったのよ。大天使長を辞めるなら一人でも多くの堕天使を退治してこいって。そうしたら引退でも何でも好きにしろって。何だかんだ言っても相手は神様でしょ？　だから無下にできなくって」

その時、秀吉がもぞもぞと動き出した。

「う……いって～……あ！　お前は大天使長！　ここで会ったが百

年目！　家康と共にお前も葬って……む！？　むがもごっ！？」

ようやく意識を取り戻した秀吉は手足は縛られていて動けないものの、悪態をついてうるさいので、猿轡を噛ませてついでに目隠しもして隣の部屋に転がしておいた。あの太陽のようなサッちゃんがこんな哀れな姿になっていると知ったら、バイト先のみんなは悲しむだろうな。

そんな説明の仕方って

四畳半の部屋に僕と佐倉が並んで座り、向かいに家康と猫が座っている。家康は自分のお婆ちゃんである猫に寄り添って動かない。

「でもそれだけじゃ詰まらないから、誰かの恋の手助けもすることにしたの」

「それが佐倉？」

「そうよ。まさか遥子さんのお相手に家康がついているとは思わなかったけど」

「佐倉のところにはいつ来たんですか？」

「一年前よ」

「一年も前に！？」

「そう……あれは今と同じ、雨がしとしとと降る梅雨寒の日だったわ。私は遥子さんのアパートの出窓に座って帰りを待っていたの。窓の外の植え込みには真っ白な紫陽花が、雨露にしっとりと濡れて光って、とっても綺麗だったのを覚えてるわ。

外から戻ってきた遥子さんは部屋で毛繕いしている私を見ると、何も言わずそっと抱き上げて優しく撫でてくれたのよ。嬉しかったわ。だって、いきなり部屋に現れたら、大抵警戒されてしまうから。その時思ったの。この子のために何としても素敵な恋を実らせてあげなくてはって」

「キャンディそんな話いいからさ」

「きゃきゃきゃキャンディ！？」

佐倉が事も無げに発した猫の名前に、思わずその顔を二度見をしてしまった。お婆さんなのにキャンディって……

「うふふ昔ね、そばかすのチャーミングな女の子が主人公の漫画を読んだことがあってね、とっても気に入ったからその時に改名したのよ」

すかさず家康を見る。血は争えないとはこういう事を言うのか……。

「いいからさっさと真相を話せって」

「せっかちねえ、遥子さんは。そんなんじゃ雅史さんに嫌われるわよ？」

「はいはい分かった分かった」

そして猫天使キャンディは、上品な声のおっとりとした口調で話し始めた。

「ここ数十年に起きた新しい事なのよ、天使が堕ちだしたのは。五百年くらい前までは堕天使なんて言葉すらなかったの。だって昔は恋を成就させられなくて堕ちる天使なんていなかったから。クピドから堕天使捕獲を任命された私は、当然ながらまず堕天使の近くに降りなくてならなかったの。堕天使の目的は天使の仕事を邪魔する事。だから最初私は降りた天使の近くにいれば捕まえられると安易に考えていたの。

でも事はそう単純にはいかなかったわ。何せこっちからは相手の正体が分からないのに向こうは私たち天使と天使がついている人間が分かってしまうものね。だから警戒心の強い彼らは、大天使長の私に気付くとすぐに姿を消してしまって全く捉えどころがなかったわ」

「じゃあ、どうしたんですか？」

「一端体勢を立て直そうと天界に帰って、モテないリストを見せて貰ったときにピンと来たのね。雅史さんがずっと一位だという事の

不自然さに。これはきっと彼らの仕業に違いないと思ったわけ。でも私が雅史さんに直接つくわけにはいかなかったわ。そんな事をしたら私が堕天使を捕らえに来た事が一目瞭然だから。そこで私は雅史さんの事を想っている女の子、つまり遥子さんの下に降りる事にしたの。そして待ったわ。雅史さんに天使がつく日を」

「え、でも一年前からキャンディさんが佐倉についてたら、秀吉にはバレちゃうんじゃないんですか？」

「そう。だから私は遥子さんの傍にはいたけれど、雅史さんに天使がついて秀吉が動き出すまでは『つく事』を保留していたの」

すると佐倉が口を挟んだ。

「ひどいんだぜキャンディのヤツ。現れた時は『私は天使であなたの恋を応援するために来た』とか言っておきながら、結局つい最近まで何にもしてくれなかったんだからな。一年も松岡に近付けなかったのはキャンディのせいだ」

佐倉が拗ねるように言った。でも天使がいなくてももう少しくらい近付けたと思うんですが。

「だからそれに関しては何度も説明したでしょう？　最初から遥子さんについてしまったら、堕天使を捕まえられないって」

「あーはいはいそーですね」

珍しくあからさまに感情を露にし、膨れっ面になった佐倉が可愛かった。

「要するにこういう事ですか？　まず初めに家康に恨みを持つ秀吉が、僕をずっとモテない状態にして家康が確実に降りて来るように仕向けた。そしてその事に気付いたキャンディさんが、秀吉を捕ま

えるために、僕の近くにいた佐倉の下へ降りてきた。そして秀吉の罠に嵌まった家康が、僕の下に降りてきた。家康が僕についた事を確認すると、サッちゃんに化けていた秀吉が牙を剥いた……」

僕はさっきの秀吉と家康とのやり取りと、キャンディさんの話から、状況を整理した。しかし。

「でも結局秀吉を阻止したのは佐倉ですよね？　そこはキャンディさんの出番じゃなかったんですか？」

「そうなんだけど。だって、『雅史さんに近付いている里美という女は実は堕天使で、今まさに雅史さんを身体を使って落とそうとしている』って説明したら、血相変えて飛び出しちゃったから……」

そんな説明の仕方って。

「松岡はオレの男だ。近付く女は人間だろうとなかろうと許さねえ」

佐倉は拳を握り締め遠くを見ている。佐倉……何てカッコいいんだ。僕は身体を張って守ってくれた佐倉に再び惚れ直してしまった。

「しかし一つだけ分からない事がある。さっきも聞いたけど、家康、何で秀吉はあんなにもお前を恨んでいるんだ？」

徳川家康のＤＶＤ

「……名前や」

みんなに見詰められ遂に観念した家康が、思い口を開いた。

「名前？　名前って何だ？」

「ワイが改名したんは徳川家康の言葉に感動したからゆう話したやろ？　実はな、そん時秀吉のヤツと一緒に見ててん」

「何を？」

「せやから徳川家康のＤＶＤ」

「え？　じゃああいつとは結構仲良しだったのか？」

隣の部屋で口も塞がれて拘束されている秀吉の呻き声が一際大きく漏れて来た。

「仲良しも何も、二人は兄弟よ」

当然のようにキャンディさんが言う。

「兄弟！？」

再び僕と佐倉が同時に叫ぶ。そして家康が嘆くように続けた。

「あいつはなあ、ホンマ出来の悪い弟やねん。人間についてもちいとも成果が上がらんかったんや。それでもこれまでは婆ちゃんが何とか庇ってくれたお陰で堕とされずに済んどったんやけどな、上司が変わってしもうたやろ。そいで成績悪いのが隠せんようになって追い詰められてたんや」

「だから人間の姿になって……それで？」
「ほいでな、以前気晴らしにワイとＤＶＤ見てたらな、秀吉のヤツも徳川家康にえらい感銘受けたんや。でな、『俺、家康に改名する』言うて興奮しとったんやけど、ワイもどうしても家康名乗りたかってん。せやから次の日朝一で役所行って先に登録済ましてもうたんや。したらあいつ、エラい剣幕で怒りよってな……しゃーないからあいつ、ワイへの当て付けの意味も込めて秀吉に改名したんや。同じ名前は禁止されとるしな」
「え、喧嘩の理由って……そんだけ？」
「そんだけ言うなや。改名は天使にとって一大イベントなんやで」
「だったら何で譲ってあげなかったんだよ。欲しがってた名前だと知ってたのに、抜け駆けされて横取りされたら誰だって怒るに決まってるじゃないか」

転がされて目隠しされたままの秀吉がウンウンと頷いている。

「そない言うけどな、原則として改名は先着順や。同じ名前を名乗りたい奴が複数おったとしても、いちいち各々の理由聞いてたらきりないからな。本気でその名前欲しかったら誰を出し抜いてでも先に登録するべきなんや。改名に関してだけは早いもん勝ちなんやで。身内だろうが関係あらへん。そんなん天使の常識や。あいつだってよう知ってるはずや。

せやから本来なら恨まれる事自体、お門違いなんや。それにな、そもそも戦国武将シリーズのＤＶＤはワイが勧めたんやで。つまりワイがおらんかったら秀吉のヤツは一生家康という名を知り得なかったちゅーこっちゃ」
「何か、千年も生きてる割に、喧嘩の内容がひどく子供っぽいのは気のせいだろうか……それで、秀吉はこの後どうなるんだ？　まさか抹殺とか……」

「大丈夫よ。捕まえた堕天使は、天界の施設に連れて行って更生させるから」

優しい声ででキャンディさんが言った。

「良かった。兄弟で殺し合いとか見たくないもんな。でもさ、例え天使として更生出来たとしても、家康への恨みは持ち続けるんじゃないのか？」

「まあそこも含めて更生してもろたらええ」

「何だよ他人事みたいに。弟なんだろ？　それに元はといえば家康が原因なんだし」

「そない言われてもな……まあ秀吉のヤツが天使として立ち直って、きっちり仕事するようになったら名前譲ること考えたってもええで」

「お、やっと兄貴らしい発言が出たな」

「じゃあそろそろおいとましましょうか」

キャンディが家康に声をかけた。

「今度こそ本当にお別れなのか」

僕は喉の奥が締め付けられ、涙が出そうになった。

「せや。人参ご馳走さん。お前ら上手くやれよ」

「ありがとう家康」

僕は剛毛の身体に抱きつき、背中を撫でた。佐倉を見ると、散々文句を言っていたがやはり寂しいのだろう、キャンディさんを抱きかかえて頬ずりしていた。佐倉の腕の中からするりと降りると、キャンディさんは秀吉の身体の上に乗った。家康も秀吉のすぐ傍へ歩み寄る。

「それじゃ、遥子さん、雅史さん、お幸せに」
「世話んなったな、ほなさいなら」
さよなら家康、そう言おうとした瞬間、二匹と一人の身体が激しく光った。僕と佐倉は見ていられずに目を覆った。そしてすぐに光が止んだ。再び瞼を開き、目が慣れてくると、部屋には彼らの姿はなくなっていた。

人参食わせろや

「行っちゃったな……」

僕は今まで彼らがいた場所を見詰めながら呟いた。

「なあ松岡」

佐倉の声に我に返る。

「なに？」

「どこまでやったんだ？」

「なにが？」

「里美と」

「えっ……どこまでって、そんなには……」

すっかり気が抜けていたところにまたもや予想外の質問をされて、激しく動揺した。

「キスはされたよなあ？」

佐倉が真正面から威圧するように見下ろす。僕は気圧されて後退り、ベッドに座り込んだ。暴力反対。

「しかも裸だったって事は、身体中にされたって事だよなあ？」

「ま、待て、落ち着け佐倉。あれは秀吉の罠だったんだから。分かってるだろ？　相手は人間じゃない。堕天使なんだ。抵抗できなかったんだ」

「堕天使の割には弱い奴だったけど？」

力で佐倉に敵わない事は既に証明済みだ。怒らせる訳にはいかない。

「だ、だから僕は操られてたんだって……」

「問答無用。どこにされたんだ？」

佐倉は力強く僕をベッドに仰向けに押し倒すと、今朝の秀吉のように身体に跨り、両腕を押さえつけた。不敵な笑みを浮かべた綺麗な顔が近付いてきて半ば怯える僕に唇に口付けた。さっきまでの厳しい口調とは裏腹の、優しく包み込むようなキスに愛を感じた。そして僕の唇と唇の間から舌が生き物のように押し入ってきた。

「んん……」

脳が痺れて堪らず呻く。佐倉の舌が、僕の上顎や歯茎をなぞっていく。触れるだけのキスをした昨日とは大違いの佐倉の舌使いに激しい快感を覚え、気を失いそうだった。長らくそうした後に、佐倉はようやく口を離した。僕のか佐倉のか分からない混じり合った透明の唾液が、二人の唇を淫らに繋いでいた。

そして、こんなキスをしたくらいだから、佐倉もそれなりに経験していて、冷静なのかなと顔を見ると、恥ずかしいのかかなり紅潮していた。その顔に女を見た僕は一気に欲情した。今度は僕が佐倉の手を取り身体の上下を入れ替えて、Tシャツを脱がせた。

「あ……」

ブラジャーを外し形の良い胸が露になる。顔を埋め口付け舌を這わせると、佐倉が初めて女の子らしい声を出した。僕らは夢中で服を脱がせ合い、裸で抱き合い、手で指で口で舌でお互いの身体を貪っ

た。遂に僕と佐倉は結ばれた。

それから僕と佐倉は、お互い一人暮らしということもあり、毎日どちらかの家に泊まるようになった。日に日に僕の中は佐倉で埋め尽くされていった。身も心も佐倉の虜だ。いくら一緒にいても会いたい気持ちは増える一方だ。文字通り恋に溺れた。そして二週間が過ぎた。学校の後、今日はお互いバイトもないのでそのまま手を繋いで僕の部屋に帰った。すると。

「何や、お前らまだ付き合うてたんか」

見覚えのある図体、聞き覚えのある関西弁。

「家康！」

思わず僕は飛び付いてしまった。

「うわったったっ重いやないかい！　離さんか！　気色悪い」

友人に久しぶりに会えた事に、堪らず顔がにやけてしまう。

「どうしたんだよ～」

僕は嬉しくて家康の頭を撫で背中を撫で耳を引っ張ったりした。

「やめんかい！　ホンマ鬱陶しいわー。こないだ天界に戻ったやんか。したら何や知らん、えらい外資系上司の機嫌がええねん。どないしたんやろ思たら、ワイの仕事がこれまでの最短記録やねんて。ま、そうやないかなとは思てたんやけど。ほいでな、記録更新ちゅ

ーことでボーナスもぎょうさん出たし、バカンスもえらい長う期間貰たからな、ちょっと様子見に来たちゅーわけや」
「そっか。でも何でまたカピバラなんだ？」
「そんなん他の動物やったらワイと気付かんかもしれんやないかい。お前ら人間は鈍臭いからな」
憎まれ口も今となっては懐かしく、心地良い。
「なあなあ、秀吉はどうなった？」
「ああ、施設に入っとる間は面会出来んけどな、毎日しごかれとるみたいやで」
堕天使の更生施設がどういうところで何をするのか全く見当が付かないが、世話になった家康の弟だ、立派な天使に立ち直って欲しいと願う。
「ま、真面目にやっとったら百年で出られると思うで」
また百年か……ということは、天使になった秀吉に会うことは出来ないのか。ちょっと残念。
「ここにはどのくらいいるんだ？」
「何も決めてへん。邪魔やったらすぐ帰ったってもええで」
悪戯っぽく言った家康は僕と佐倉を交互に見比べる。
「別に邪魔ってことは……ねえ？」
僕は佐倉に意見を求めたが、勝手にすればとばかりにそっぽを向いてしまった。僕としては、少しの間なら大歓迎だけど。

「じゃあちょっと三人で散歩にでも行くか？」
「あかんあかん」
「何で？」
「何でやあれへんがな。腹へってしゃーないのに外なんか歩けるか。人参食わせろや」

やれやれ。結局最初から最後まで人参か。苦笑いの僕は佐倉の手を取って、スーパーに向かった。

人参食わせろや（後書き）

これにてこの物語は終わりです。最後までお付き合い頂いた皆様、本当にありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7392m/

かぴかぴ

2010年10月8日12時23分発行